

## 緑亭生・緑亭主人は、角田柳作か

明治二十九年から三十年までの民友社の彗星

島内景二

### 1 研究の経緯

【福田秀一先生】

二〇〇二年の大晦日、まもなく国際基督教大学を定年される予定の福田秀一先生から、「本の整理をしている。あなたの研究に活用しなさい」と言って、徒然草研究者である島内裕子に、中世文学関係の珍しい研究書が箱入りで何冊も送られてきた。夫婦二人で荷ほどきしていると、その中に、「緑亭生」という聞き慣れない著者の『兼好法師』が交じっていた。初めて目にする本である。

徳富蘇峰の民友社の刊行。手にした瞬間に「緑亭生とは、もしかしたら島崎藤村のことかな」と思ったが、思い直せば藤村は「緑陰生」であるし、文体がまるで違うから、問題外である。

それで、まず、『兼好法師』の中身を、読んでみた。

【兼好伝説を取り込んだ明治期の最初の評論書】

明治三十年四月刊行の『兼好法師』は、兼好法師に関する最も早い明治期の単行本の一つである。『徒然草』に関する注釈書は膨大だが、作者に関心を持った人物論ないし評伝は、明治期には少ない。しかも、現在はほとんど顧みられない各種の「兼好伝説」をふんだんにちりばめた興味ある一冊だった。

ここでいう「兼好伝説」とは、『徒然草』の著者として名高い兼好が、伊賀の国の国見山の麓の種生村で没したという伝説を核として作り上げられた各種の工ピソードのことである。幕末期に、隆盛を見た。また、伊賀上野の出身だった松尾芭蕉にも、大きな影響を与えた。これらを最初に、「近世兼好伝」と命名して、文学史の中に位置づけたのが、島内裕子だった。

ところが、近世兼好伝は、明治以降、次第に根拠のない憶説と見なされるよう

になり、客観的な文芸評論や史論からは無視されるようになっていった。ところが、緑亭生は、この兼好伝説の中に、虚構の衣装を纏った何かしらの真実がある、と考えている。そして、それを論述の中心に据えて、兼好の評伝を織り上げてゆく。

『兼好法師』は、国文学に関する相当の知識と、文芸批評家としての豊かなセンスに恵まれた、かなりの水準の著書である。これほどの人物の本名が不明というのは、彼（文体から推して著者は女性ではありえない）の名誉のためにも惜しまれてならなかった。

【川柳界の緑亭には、あらず】

とりあえず、手許の資料で、「緑亭生」についての情報を得ようとした。すると、「緑亭」とは『誹風柳多留』を編纂した柄井川柳を筆頭とする宗匠たちの代々の名前だ、明治時代にも何代目かの「緑亭」がいたことはわかった。けれども、明治期の川柳の宗匠に、このような本格的な古典文学評論が書けるはずはなく、この方向での探索は中止した。それほど、『兼好法師』は、漢文調の美文で、戯作調のものではない。その著者は、本格的な文学者として遇さねばならない。

【民友社関連の研究書にも見えず】

『兼好法師』は、民友社からの刊行である。民友社に関しては、政治・文学・思想などの各方面からの研究史が蓄積されているので、諸書に記載のある民友社関係者の「筆名一覧表」を調べてみたが、「緑亭生」の本名を突き止めた研究書も、「緑亭生」という人物の果たした役割に言及した研究者も皆無であった。すなわち、「緑亭生」は、民友社の研究者からも忘れられた人物であった。

【緑亭主人も、緑亭生と同一人物か】

先行研究がないので、全くの白紙から「緑亭生」の本名の探索が、始まった。島内景二は、最初は島内裕子の研究の軽い手伝いをするつもりだった。ところが、緑亭生という名前をどこかで目にした微かな記憶があったので、明治時代の古典文学受容史を調べてみた。すると、「緑亭生」とよく似た名前の「緑亭主人」という人物が、『紫式部』という単行本を明治二十九年十一月に刊行していることを知った。刊行時期が接近しているし、どちらも民友社の発行なので、「緑亭生」と「緑亭主人」は同じ人物かもしれないと予想した。『源氏物語』は、わたしのライフワークである。

文春新書『文豪の古典力』以来、明治の文学者たちが『源氏物語』をどのように受け止めたかを新しい研究テーマに設定した島内景二は、ここから自分自身の問題として「緑亭主人」の本名の探索に本気で乗り出した。

【緑亭主人の『紫式部』に感銘を受ける】

まず、『紫式部』の实物を読まねばならない。明治大学の図書館で『紫式部』を閲覧して、通読した。「愛の挫折」あるいは「愛の不如意」の物語として源氏物語全体を捉える斬新でみずみずしい図式に、はなはだ感動した。

また、王朝物語の本質を、それに先立つ古代社会の精神世界から説き起こす「文学史的視野」の大胆な視点と、紫式部の人間性の奥底をのぞき込む細心な視点との調和に驚く。

これは、文学論や人間論であるだけでなく、文化論であり、精神史論であり、すぐれた文明批評であると思った。そして、これだけの素晴らしい本を書いた人物が、現代社会で忘却されていることを不思議に思った。かつ、その著者の本名がはつきりしていないのは、自分を含めた研究者の怠慢だと深く反省した。

また、発想と文体が『兼好法師』と『紫式部』とでまったく同じだったので、「緑亭生」「緑亭主人」という可能性は、いよいよ高まった。

【『清少納言』と『雲井龍雄』を読む】

大学図書館の蔵書情報を網羅したウェブサイトで検索すると、「緑亭主人」の著書が更にあと二冊あることがわかった。所蔵先も判明したので、東京大学総合図書館から「緑亭主人」著の『清少納言』を借り出し、同じく東京大学の社会情報研究所で「緑亭主人」著の『雲井龍雄』を閲覧した。

なお、東京大学でかつて非常勤講師を務めた関係で、「元教官」として総合図書館の書庫に自由に入れたり、貸し出ししてもらえたことは、今回の研究に大変に役立った。心から感謝したい。

さて、これまで「緑亭生」ないし「緑亭主人」の著作だと判明している『兼好法師』『紫式部』と並べてみると、『清少納言』というテーマは納得できたが、幕末の『雲井龍雄』は何とも意外であった。

けれども、この四冊は、驚くべきことに、すべて同一の文体で、同一の方法論と文明史観に裏打ちされていた。一人の著者が、これらの四冊を書いた事実、動かし得ないと判断した。『清少納言』は、明治二十九年十一月、『雲井龍雄』は明治三十年四月の刊行であり、いずれも民友社から出版されている。

また、人物評伝の巻末に、参考資料として「梗概」を付けたり「家集」「日記」「作品集」を付けたりするという体裁も、すべて一致している。同一の単行本作りのスタイルが踏襲されているのである。

ここまでの調査によれば、同一人物が明治二十九年の十一月から翌三十年の四月までのわずか半年間に、単行本を四冊、民友社から立て続けに世に問うたことになる。これは、何とも大変な筆力である。

しかも、『清少納言』は、『紫式部』と匹敵する力作であった。古代社会から王朝にかけての歴史の一大変革期に、清少納言が「古代精神の復活」を企図したという認識の提示には、脱帽した。現代（近代）の立場から、古代を見通す眼力に、すごいものを感じた。

その点、『雲井龍雄』は、いささか期待はずれだった。時間に追われて、著者本人も未消化の「やつつけ仕事」だったのであろう。しかし、だからこそ、緑亭主人の「文体の本質」と「文明観の本質」が露呈しており、著者の手がかりをつかみたい研究者にとってはありがたい本であった。

【「緑亭生」と「緑亭主人」からの調査、行き詰まる】

しかし、これだけの才能ある人物の本名を知る手がかりは、まだ得られない。ここで、「緑亭生」と「緑亭主人」からの探索を一旦中止して、これらの本を上梓した「民友社」からの探索を開始することに方向転換した。

ウェブサイトで国会図書館の検索などで、明治三十年前後の「民友社」の刊行物を一覧表にしてみた。そして、本名が既にわかっている人物の単行本と、「緑亭主人」「緑亭生」の著作群との「文体の一致」と「思想の一致」を、手当た

り次第に調べてみることにした。一見すると迂遠なアプローチだが、これが意外と「緑亭生」「緑亭主人」の本名の探索の近道であるように思われた。

#### 【「角田柳作」という人名の発見】

すると、緑亭生・緑亭主人名義での最後の単行本『兼好法師』が出た明治三十年四月の翌月に、やはり民友社から、「角田柳作」という人物が『井原西鶴』という本を出版していることがわかった。早速、『井原西鶴』を東京大学の社会情報研究所で閲覧して、読み比べてみた。

すると、文体・思想の両面のどちらも重なり合う点が多いことに気づいた。また、内容的に一部重ならない点もあったが、これは「筆名（戯名）」による著述」と「本名での発表」による相違ではないかと考えた。本名の場合には、どうしても固く、重なりがちである。一方で、筆名の際には、筆が奔放に飛翔しやすい。けれども、古代社会の原点から日本人の精神史を説きおろす「緑亭主人」の法論は、『井原西鶴』でも健在であった。井原西鶴という江戸時代の文学者の評伝を書き記すために、あえて古代人の精神史から説き始めるとするのは、きわめて尋常ではない方法論である。しかしながら、『紫式部』や『清少納言』などの著作を「角田柳作・前史」として位置づければ、『井原西鶴』の不思議な方法論はごく自然に納得される。

このように、角田柳作の『井原西鶴』は、『紫式部』や『清少納言』の方法論と一致していた。彼が日本人の精神史を社会変革の中で大胆に捉えようとしている「熱き志」に改めて心を打たれた。しかも、人間は自分の生きる時代に制約されつつも、その時代に埋没してはならないと説く主張には、深く同意するものがあった。

また、文体の特質も、これまで熟読してきた緑亭主人・緑亭生名義の著作と完全に一致した。もちろん、明治時代の「美文調」だから、誰が書いても近似する文体にはなる。だが、後述するように、文体と発想の一致する箇所は、まさに「不可勝数」であった。別人がこのように酷似する語彙を駆使することは、不可能であろう。

調べてみたら、『井原西鶴』の著者である角田柳作は、刊行当時まで満二十歳数え年でも、二十一歳の若者だった。

もしも「角田柳作」「緑亭主人」「緑亭生」とすれば、彼は満十九歳から二十歳にかけて、『紫式部』『清少納言』『雲井龍雄』『兼好法師』『井原西鶴』という五冊

を、たった一人で、一気に書き下ろしたことになる。

こんなことが可能なのだろうか。むろん、明治の文学者たちは山田美妙・尾崎紅葉など、二十歳そこそこで文壇の寵児となるような早熟の才能の持ち主が多い。しかし、現在に名前すら伝わっていない「緑亭主人」が、そんなに多作でありうるのだろうか。これが、わたしの偽らざる疑問だった。

ただし、角田「柳作」という名前を見た瞬間に、「緑亭」という筆名と通い合うものがあると、わたしは直感した。「花は紅、柳は緑」という諺からの連想もあった。緑亭主人名義の著書で、何回もこの諺を目にしていたからである。

#### 【さらに二冊の著書を発見する】

しかし、驚きはなおも続いた。東京大学の社会情報研究所に所蔵されている民友社刊行物は、伊藤痴遊の旧蔵書であった。それを片端から閲覧してゆくと、もう二冊、同じ著者（すなわち、角田柳作）の手になると強く推定される刊行物が見つかった。まさに、「芋づる式」である。

まず、「中龍児」という人物の書いた『詩人西行』。これは、明治二十九年十二月の刊行である。緑亭主人名義の『清少納言』が、同じ民友社から同じ明治二十九年十二月に刊行されているので、同一名義を避けて、新たな筆名を考案したものであろう。

次に、著者名の記載のない『日本文学梗概』。これは、明治三十年七月の刊行。この書は、「住吉物語梗概」「とりかへばや物語梗概」「竹取物語梗概」「古事記梗概」の四つのパーツから成り、最後の「古事記梗概」が最も充実している。

新たに発見した二冊は、「角田柳作」「緑亭主人」「緑亭生」と全く同じ文体・思想に裏打ちされた著書であった。中龍児名義の『詩人西行』は、大変に熱のこもった評伝であり、著者の西行への心からの愛情があふれている名作である。伝説の人・西行の後ろ姿を必死に追いかけて、その素顔に迫りたいという情熱が溢れている。

これで、「角田柳作」「緑亭主人」「緑亭生」の著書は、明治二十九年十一月から明治三十年七月までに、単行本が七冊ということになった。超人的な執筆である。しかも、水準が高い。強いて言えば、『雲井龍雄』が凡作、『日本文学梗概』の「古事記梗概」以外の部分が、退屈である。

#### 【『国民新聞』を閲覧する】

さらに社会情報研究所で、民友社の刊行物である『国民新聞』を閲覧した。「角田柳作」・「緑亭主人」・「緑亭生」の著書は、すべて民友社からの出版だったからである。

緑亭主人は、『花源氏』というタイトルの短編を発表していた。何と、彼は、小説にも手を染めていたのだ。明治二十九年八月二日から二十三日までの、日曜日の文芸欄に連載されている。

なお、社会情報研究所では欠号となっている期間の『国民新聞』の項目を、別の書誌で調べてみた。すると、緑亭主人は明治三十年一月に『黄金男』という短編を、そして同じ明治三十年一月に『一葉全集と源氏物語』という記事を、それぞれ『国民新聞』紙上に書いていることもわかった。

『紫式部』という著書が「緑亭主人」にはあり、角田柳作名義の『井原西鶴』には「樋口一葉」への詳しい言及が見られるので、この「一葉全集と源氏物語」という新聞記事も、「角田柳作」・「緑亭主人」・「緑亭生」の執筆である確率が、きわめて高い。

#### 【民友社の『家庭雑誌』を読む】

『井原西鶴』の著者であることが確実な「角田柳作」という人物の調査に入る前に、「民友社ルート」をさらに詳しく探索した。

民友社から刊行されていた雑誌に、『家庭雑誌』がある。現在では、その復刻版が出版されているので、緑亭主人の爆発的な活躍のあった明治二十九年から三十年にかけての『家庭雑誌』を通読した。

すると、緑亭主人名義の文章は見つからなかったものの、明治二十九年には、「俳諧堂主人」という筆名があり、興味を引いた。俳諧堂主人は、『家庭雑誌』では主として日本古典文学の評論などを行っており、「源氏物語」や「緑陰雑話」などというエッセイを書いていた。

俳諧堂主人の文章は、婦女子向けに平易に書いてあるので、美文調の緑亭主人名義の単行本と文体の印象がかなり異なる。しかし、緑亭主人の最初の単行本『紫式部』と『清少納言』は、この『家庭雑誌』の号外という形式であった。常識で考えても、『家庭雑誌』と縁もゆかりもない人物が、いきなりその雑誌の別冊付録を書くことはなからず。

ここで、「緑亭主人」・「俳諧堂主人」ではないかという推測が発生した。そういえば、民友社の『国民新聞』にも、緑亭主人とほぼ同時期に「俳諧堂主人」は文

学記事を書いている。俳句や川柳に関するエッセイである。

さらに、同じ時期の『家庭雑誌』には、「欲東」あるいは「欲東老人」という筆名の人物が、婦女子向けに古典文学読書案内を連載しており、これもまた「緑亭主人」・「俳諧堂主人」と同一人物の可能性が否定しきれなかった。ただし、内容的には緑亭主人の著作と相違点がいくつかあるので、完全に同一人物と断定する自信は、まだ得られていない。今後の課題の一つである。

当時の民友社で、古典文学に関する書き手は、おそらく角田柳作ただ一人ではなかったろうか。そういう推測が、わたしの心の中に頭を擡げてきた。

#### 【『国民之友』とは、無関係】

なお、民友社の看板雑誌だった『国民之友』（この機関誌から「民友社」という社名が付けられた）には、「緑亭生」・「緑亭主人」・「角田柳作」・「中龍児」と関わる記事は、一切発見できなかった。

わたしが追い求めている人物は、民友社から、半年ちよつとの間に、立て続けに七冊の単行本を上梓している。しかし、その出版は、最も目立たない『家庭雑誌』の埋草の執筆であり、その力量を認められての『家庭雑誌』号外としての単行本出版だったのである。紫式部と清少納言の人物評伝は、まさに『家庭雑誌』の付録としてふさわしい。民友社の基幹をなす活動ではなかったのだが、だからこそ、自由で活発な活動が爆発したのだとも考えられる。

『家庭雑誌』の自社刊行物の広告欄には、『紫式部』が新聞などで好評裏に書評され、何度も増刷・再版されたことが記されている。この成功によって、緑亭主人は、『家庭雑誌』の付録ではなく、文字通りの単行本として、『詩人西行』や『兼好法師』などを出版させてもらったのだらう。

ただし、民友社の中で最も重みのある『国民之友』とは、最後まで無縁だった。これが、「緑亭主人」の本名を探索する手がかりの少なさにつながったのかもしれない。

#### 【『早稲田文学』に見る緑亭主人の痕跡】

次には、緑亭生の『兼好法師』が、『早稲田文学』掲載の水谷不倒論文への反論である点に、注目した。水谷は、明治三十年一月から二月にかけて、『早稲田文学』（当時は、月二回の発行）に、「兼好と俗文学」という論文を三回連載している。

それに対して、民友社から同年四月に発行された『兼好法師』で、緑亭生が反論したのである。水谷不倒が「兼好伝説」を否定したことに対する反論である。それにしても、緑亭生の反論の時期が早いことに気づかされる。

「緑亭生」緑亭主人」が、よほど熱心に『早稲田文学』を読んでいたことがわかる。また、『井原西鶴』にも、『早稲田文学』掲載の水谷不倒や島村抱月の西鶴論への言及が見られる。おそらく、早稲田関係者で、なおかつあまり水谷不倒と仲のよくなかった人物が、「緑亭主人」なのだろうという推測が成り立つ。

ここで、明治三十年前後の『早稲田文学』の復刻版を通読することとした。すると、『紫式部』『清少納言』『雲井龍雄』『井原西鶴』『日本文学梗概』の「近刊紹介」（短文での書評）が、『早稲田文学』誌上でなされていることがわかった。

この「近刊紹介」で『日本文学梗概』を「渡辺為蔵」著とするのは、発行者名を著者名と混同したものである。同書の著者はなぜか無記名であるが、文体的には「緑亭主人」であると推定される。おそらく、緑亭主人は、民友社の正式社員ではなく、なっていたのではあるまいか。『日本文学梗概』は、緑亭主人の民友社からの最後の著作になった。短期間に彗星のように活躍した緑亭主人は、最後の著書を筆名すら明示せずに、文学史の間に消えていった。

また、『早稲田文学』誌上では、『詩人西行』『兼好法師』に関して、わずかながら（発行月よりかなり後の時点での簡単な）言及が見られる。軽い扱いではあるが、書名をしっかりと挙げている点には留意しておく必要がある。

また、『早稲田文学』では、文壇の状況を記す欄に、『国民新聞』掲載の緑亭主人の短編小説のタイトルも、項目だけが二つ収載されている。「花源氏」と「黄金男」である。

以上の事実から、緑亭主人が早稲田大学（当時の正式名称は東京専門学校）の卒業生であることが、高い蓋然性で推測される。

#### 【角田柳作という人物】

さて、ここから、「角田柳作」つのだ・りゅうさく」という人物について、総力を挙げての探索が開始した。本当に、緑亭主人・緑亭生は、角田柳作なのだろうか。

予想したとおり、角田柳作は、東京専門学校第四期生だった。旧制の前橋中学を三年半で卒業し（正式には準卒業扱い）、東京専門学校をわずか満十九歳の明治二十九年七月に卒業している。この卒業後に、怒濤の執筆期間が来て、年

代的には矛盾しない。現に、最初の単行本『紫式部』は、明治二十九年十一月の刊行である。それにしても、若い。早熟の天才とは、このことだろう。では、「早熟の天才」が長生きしたら、どんな人生を送るのだろうか。

調べ初めて驚いたのは、何と、これまで耳学問で何度か聞いていたコロンビア大学でドナルド・キーン氏が学んだ卓越した日本思想史の「先生」こそが、この角田柳作なのだ。角田柳作については、司馬遼太郎『ニューヨーク散歩』、長田弘『詩人の紙碑』という名著がある。キーン氏の『日本との出会い』という本もある。キーン氏は、第二次世界大戦が集結してコロンビア大学に戻ってきて、角田柳作からわずか三箇月間で、『源氏物語』・『徒然草』・『枕草子』・謡曲・西鶴・芭蕉などを集中的に学んだという。これらは、ほとんどすべて、「緑亭主人」のレパトリーなのだ。『緑亭主人』角田柳作」とするならば、コロンビア大学でアメリカにおける日本学の基礎を築いた「角田柳作」の空前の学識の豊富さが証明される。

しかも、角田柳作がコロンビア大学で講じた「日本文化史」こそ、古代から近代までの文明史をたどったもので、緑亭主人名義の著作群の延長線上にある。しかも、緑亭主人の古代文明史観では、「仏教の流入」が最大の事件の一つと繰り返して語られるが、これはまさに角田柳作の英語の講義録の基本姿勢でもある。母国語ではない英語で著作を残さなかった角田柳作に替わって、弟子のキーン氏とドバリー氏が角田の講義録を元に、巨大な日本文化史論をコロンビア大学から発行している。それを読むと、文学論から文化論・思想史論へと視軸を移しているが、若書きの「緑亭主人」時代の発想が何度も顔を出しているのに気づく。

#### 【キーワードの比較調査】

この段階で、「緑亭主人」「緑亭生」「中龍児」名義の単行本で繰り返し用いられていた特異な語彙が、角田柳作名義の著書にも見られるかどうか、調べることにした。文体の比較であり、内部徴表から「緑亭主人」「角田柳作」を証明しようとしたのである。

角田柳作の日本語の翻訳、エッセイ集にも、「緑亭」の文体や語彙と重なる箇所はある。しかし、決定的な証拠はない。しかし、昭和三十九年に死を覚悟した角田がニューヨークから日本に帰ろうとして、詠んだ漢詩がある。

弟子たちが英文で出版した追悼文集『RYUSAKU TSUNODA SENSEI』に、写真が載っている。改行を原文通りにして、示す。

乾坤有余樹孤筇且悅

青空連東海鷗翼一夜

七千里清風明月歸去來

昭和申辰仲秋 柳吟

ここに、「孤筇」という言葉と、「清風明月」という言葉が見える。これは、何と中龍児名義の『詩人西行』に見える言葉である。ちなみに、「孤筇」は、『兼好法師』にも見える。

日本とアメリカを旅して、旅の途上で死んだ角田柳作は、自らの漂泊の人生を「西行」の人生になぞらえ、若かりし頃の自分の西行論の語彙を、無意識のうちに復活させたのだろう。長田弘『詩人の紙碑』が、この漢詩を引用しながら、「孤筇」と誤植しているのは、痛恨の極みである。

この角田柳作の辞世として伝えられる漢詩を見た瞬間に、緑亭主人などの筆名が若かりし頃の彼の筆名だったのだ、とわたしは確信した。

#### 【卒業文集を読む】

さらに、明治二十九年の東京専門学校卒業文集『へだてぬとも』を、早稲田大学中央図書館で閲覧した。そこに掲載されていた角田柳作の本人の文章（人生観や卒論の大意）には、緑亭主人の著作との関わりをうかがわせるものはなかった。けれども、卒業文集の冒頭に据えられた序文（執筆者不明）の中に、緑亭主人の愛用している言葉遣いが複数見られた。よって、『へだてぬとも』の序文は、角田柳作の執筆と推定される。卒業後に民友社に入社して、「緑亭主人」として爆発的な著作活動を行う素地が、既にこの段階でなされていたのだろう。

『源氏物語』や『古今和歌集』などの古典文学を、彼らの学年が著名講師から熱心に学んだことが、この卒業文集に書かれている。記憶している先生と講義科目の列挙によって判明する。そもそも、『へだてぬとも』という言葉自体が、古典的な知識を必要とする歌語（歌ことば）である。

当時の東京専門学校は、「早稲田田圃」にあつて、雁の群れが空を渡るのが見えた。雁は、群れをなして飛ぶ習性がある。それが、「隔てぬ友」である。入学以来、雁のようにいつも一緒に学んだ若者たちが、明日からは卒業してそれぞれの居場所に散ってしまう。しかし、心だけは「雁行」した学生時代の友情を忘れ

たくない、という主張である。この『へだてぬとも』というタイトルも、角田柳作が中心となって考えたとすれば、面白い。

角田柳作は、本名と筆名で、少し文体を変えていたのかも知れない。筆名の時に、「緑亭語」とも言うべき大胆な美文がほとばしる。この卒業文集の序文は、おそらく角田柳作の筆になるものであり、緑亭主人の気持ちで書いたものだろう。それに対して、本名で書いた卒業論文『莊子』についてのエッセイは、思いこみを極力排除して、淡々としている。

#### 【角田柳作の調査】

ここから、「角田柳作」関連の論文・ビデオ・評伝・紹介文を可能な限り収集した。同時に、戦後の雑誌に散発的に書かれた角田柳作のエッセイや講演録・座談会もほとんどを収集した。

角田柳作の出身である群馬県と早稲田大学で、たくさんの関連書や紹介文が書かれている。また、町おこしや、大学の宣伝でも、角田柳作の名前は顕彰されていた。今年度の早稲田大学卒業式で、総長はノーベル賞の田中耕一氏と並んで、角田柳作を話題としているくらいである。

なお、この調査に当たっては、早稲田大学中央図書館の所蔵資料を大いに参考にさせてもらった。早稲田大学文学部の大久保孝治教授のご紹介で、閲覧の便宜を図っていただいたことが、どんなに研究に役立つかが計り知れない。

このように、早稲田大学関係者の努力で、角田柳作の人生の歩みは、相当に細かなところまで研究されていた。けれども、明治二十九年七月に東京専門学校を卒業してから、明治三十年一月頃に正式に民友社に入ったというあたりの年譜は、ほとんどが空白状態だった。従来の角田柳作研究において、彼の具体的な経歴が何とか辿れるのは、京都で中学教師となった明治三十二年八月以降である。

民友社では、英字版『国民之友』である『極東』の英語の校正をしていたという事実、および角田は徳富蘇峰よりも蘆花が好きだったということしか、従来は報告されていない。

ところが、わたしの推測では、この「角田柳作年譜」の空白期間に、火山活動にも喻えられる爆発的な「緑亭主人」としての執筆活動があったのである。

また、そう考えて初めて、ハーバート・ノーマンやドナルド・キーンといった逸材を教え子から輩出し、「アメリカにおける日本学の父」とまで称えられる名教師になり得た事実が納得できる。

「よき書き手」であることを何らかの事情で断念した角田柳作は、「よき教師」への転身をめざした。そして、明治三十二年以降、角田柳作は京都・福島・仙台・ハワイ・アメリカ本土へと、終わりのない教育の「旅」をつづける。それはあたかも、西行・宗祇・芭蕉の漂泊の旅の姿とも重なる。

その長い教師活動の遍歴を支えた素地は、満十九歳から二十歳にかけての「日本文学者の個性的評伝」あるいは「日本精神史研究」ともいべき七冊の（一冊一冊は小著でも）情熱的で（七冊集まれば）大部な著作群なのだ。それらは、広義の文明批評なので、「実証主義」一点張りの国文学者からはこれまで無視されてきた。今、学問の国際化の必要性が強く叫ばれる時代にあつて、

明治から昭和にかけて「開かれた視野での精神史研究」を実践しつづけてきた角田柳作は、再評価されるべきである。そして、「若書き」の時代に「筆名」でなされたものとして、本人自らも封印した著作群の価値にも、改めて光を当てたい。若書きなればこそ、そして筆名なればこそ、自由で奔放で、大胆で清新な「古典批評」が可能だったのである。その価値は、いつまでも色あせない。

#### 【緑亭主人の再評価を】

角田柳作の「日本学」樹立と、海外への播種の大きな歩みは、「緑亭主人」「緑亭生」「中龍児」、さらには「俳諧堂主人」「欲東」などの名義による一連の民友社著作物から開始した。

さらに、民友社と深い関わりがあり、角田柳作の出身である群馬県ゆかりの『上毛之青年』という雑誌（娼娼運動の中心雑誌として近年では高く評価されている）にも、角田柳作の文章が無署名で交じっているようにも思われる。

また、今は憶測なので詳しくは書けないが、これから、いつそ研究を進めれば、東京専門学校在学中の自由民権運動との関わりなども発掘されるのではないかと、とすら思わせる。

角田柳作と関わる人脈は、近代日本の多くの領域、ひいては欧米にも及んでいる。

角田柳作に教えを受けたノーマンは、「忘れられていた知の巨人」安藤昌益を発掘した。同じように、「忘れられた明治の知の巨人」である角田柳作を、今度はわたしたちが、その初期の著作群から発掘しなければならぬのではないかと、

#### 【大きな宿題】

今後は、群馬県の生家（角田家の本家）に残っているという角田柳作の東京専門学校時代の講義ノートなどの資料に接する機会を、是非とも持ちたい。そうすれば、「角田柳作＝緑亭主人＝緑亭生」という推測は、さらに確率が高まるのではないかと期待される。あるいは、内部徴表ではない、決定的な証拠物件が発見されるかも知れない。

これまで数回、生家に調査を申し込んだが、残念ながら現在の時点では実現していない。今後の最大の悲願である。

## 2 研究の意義

#### 【著書を残さぬ人」という既成イメージの打破】

角田柳作（一八七七一―一九六四）は、「忘れられた知の巨人」とか「知られざる明治の国際人」というイメージで語られることが多かった。博識の司馬遼太郎ですら、そうであった。司馬は、教え子のキーン氏の文章を通してしか角田柳作の声を聞けないのも悲しんでいる。しかし、今回のわたしの発見によって、若き日の角田柳作の肉声を聞くことが可能になったのである。

「学生の教育に熱心なあまりに、自分の著述をしないタイプの間人」だと思われてきた角田柳作のイメージが、大きく変化することだろう。今回、わたしは青春前期の角田柳作の知られざる著作群を大量に発掘した。彼が「よき教師」となる以前に、「情熱的な評論家」を目指した時期があった事実にも光を当てたものである。この短期間の爆発的な執筆活動は、角田柳作の人生を考える際に、不可欠のものとなるだろう。

満十九歳から二十歳にかけて、怒濤のように単行本七冊を刊行した事実を知ること、コロンビア大学で「日本学」の種を伝播しつづけた角田柳作の計り知れぬ学力と、透徹した歴史観・人間観・文明史観を改めて納得することができるのである。

#### 【井原西鶴』の位置づけの変更】

従来、角田柳作の年譜研究において、彼の最初の著作は『井原西鶴』であるとされた。満二十歳での著作を、彼の六番目の単行本だと、誰が予想できるだろうか。これまでの思いこみは、ある意味で仕方のないことであつた。

けれども、この『井原西鶴』の不評が彼の人生の転機となったというような見方がなされている点に関しては、修正する必要がある。若くして書いた『井原西鶴』が、『六合雑誌』などで厳しい批評を受けたことが、彼を絶望させ、文筆から教育へと転身を図った、という説明方法である。確かにわかりやすくはあるが、実際はそうではない。

『井原西鶴』は角田柳作の最初の著作ではなく、彼の青春のすべてをぶつけた全著作群の総決算と言つべき「卒業制作」であり、まさに掉尾を飾る力作であった。

彼の問題意識が孤独な書齋での「著作活動」から、社会での実践を目指した「教育活動」へと転換する契機となっていた。まさに、「文学への訣別の書」とでもいふべきものである。だからこそ、初期の著作の中で、唯一、実名で書かれたのである。

『井原西鶴』は、批判されたばかりではなかった。『早稲田文学』では欠点と長所との双方が公平に指摘されているし、『六合雑誌』でも熟読すればそれほど酷評されているわけではない。現に、このあと、角田柳作は『六合雑誌』に何度も論文を発表している。『井原西鶴』の評価は、それほど著者を失望させなかったであろう。彼は、ここで燃え尽きたのである。書き尽くした、と言ってもよい。

『井原西鶴』の世評の低さが角田柳作の人生の転機となったのではなく、それに先立つ著書を含めた半年間の評論活動を通して、内発的に「変化」の意欲が角田柳作の心の中に湧き上がってきた、と考えるべきだろう。

「緑亭主人」「緑亭生」「中龍児」という筆名で書かれた著作群には、筆名なるがゆえの大胆な叙述が見られる。それは、角田柳作が「文学との訣別」を決意して百年後の今、新たな光を放ち始める。

角田柳作が筆を折った一つの理由として、彼が「美文調」の「文語文」で最も確に自己表現できるタイプの文学者だったことが挙げられると思う。彼にとって決定的に不利だったのは、明治二十年代から、怒濤のように「言文一致」の動きが加速し、口語文で自己表現できることが一流の文学者の条件となりつつあったということだ。

角田柳作は、『井原西鶴』のあと、何冊かのエッセイ集を出している。それらは、時代に合わせて口語文で書かれている。それらでは、個性というか、強烈な自己主張が希薄である。角田柳作は、言文一致の口語文では批評活動をできない、と見切りを付けたのではないか。

一方、角田柳作は永らく英語を用いて教育活動を展開したが、英語で自己表現することは、口語文で自己表現するよりも、さらに困難である。角田柳作にとつて、最も自己の精神世界を写し取るのに適した文体は、「文語文」であった。蠟燭が消える直前に大きく燃え上がるように、明治三十年前後には、「文語文」の最後の輝きがあった。樋口一葉、しかし。その後の角田柳作は、「自己表現に適した文体」に、終生出会えなかったのである。

文語文を葬り去った現代社会は、二十一世紀の今、日本語の最大の危機を迎えている。言文一致の口語文でしか文章を書けなくなった文学者ばかりが、蔓延している。文学者の個性も、希薄となった。この時、青春の熱き情熱を、「文語文」で高らかに謳いあげた「緑亭主人」「角田柳作」の著作群が精彩と異彩を放ち始める。それらは、閉塞しつつある現代の文学状況を打開するヒントに満ちていると言えよう。

#### 【民友社文学の見直しを迫る】

従来の「民友社文学」は、『武蔵野』の国木田独歩と、『不如帰』の徳富蘆花、および詩人の宮崎湖処子などを中心に論じられてきた。

むろん、民友社の総帥としての徳富蘇峰が最重要であることは、疑いえない。しかし、東京専門学校を卒業したばかりの満十九歳（数え年でも二十歳）の若者・角田柳作が、ここまで活躍できた事実は、重い。「民友社文学」の系譜の中に、「角田柳作」「緑亭主人」「緑亭生」「中龍児」の名前を重要人物の一人として追加すべきである。

この当時の民友社は、経営が逼迫しており、原稿料の高い著名文化人への原稿依頼を避ける傾向にあったという。民友社内部の社員に原稿を書かせて、安い原稿料で済ませていたらしい。むろん、ただ働きではなかった。

民友社の中では最も扱いの軽い『家庭雑誌』の埋草記事や付録（おまけ）として原稿を書き始めた「緑亭主人」「角田柳作」は、民友社からそれほど期待されていたわけでもないし、本人も軽い原稿料稼ぎのつもりだったのだろう。けれども好評につき、たちどころに七冊も単行本を刊行したというのは、ただものではない。中には、『雲井龍雄』のように、所謂「やつつけ仕事」をしてしまった本もある。『早稲田文学』の書評はさすがに『雲井龍雄』に対しては厳しく、種本を引き写しただけで新味がない、と酷評している。角田柳作には、『井原西鶴』への批評よりも、この『雲井龍雄』への痛罵の方が身に応えたはずである。しかも、



身内の早稲田関係者からの罵声である。

しかし、である。どんなに金銭的な動機があったとしても、また、どんなに時間に追われた不満足な仕事だったにせよ、「古代人の精神世界をすべての出発点において、古代・王朝・中世・近世の大文学者の心を抉り出す」という文明批評の方法を強く打ち出した点は、素晴らしい。非常に良質な古典批評の先駆者として、国文学研究の立場からも再評価すべきであろう。それは、末梢的な事実の詮索に墮し、大きな文明観を喪失した現代の国文学研究者に猛省を迫るものである。

【過去を抹殺した角田柳作の思いの深さ】

ハワイの仏教系（本願寺系）の中学校長時代、角田柳作は、自分の過去の文章は、「ことごとく書きなぐり」「書き放し」だから、「自分の書いたものは二度と手にしまいとして居る」と述べている。『書斎・学校・社会』（布哇便利社、大正六年）の「はしがき」の部分である。正確に、引用しておこう。句読点の間違っても、原文のままとする。

僕は文章を書くには書くが未だ曾て文章を生命として書いたことはない。必要に迫られて、言はゞ其場の責ふさぎに、一時を糊塗するに過ぎないのであった。従て悉く書きなぐり、書き放しで、後から見ると自分ながら慚愧に堪へぬ様な点が多いので、自分の書いたものは二度と手にしまいとして居る程である。且つ自分の考は数年来激変して居る。従て過去の立論対策中に、我から進んで変改抹消を要求すべきものも尠くない。

この言葉は、まことに重い。彼が否定したのは、これまでの年譜研究で知られている数少ない雑誌発表の論文類だけではない。東京専門学校卒業直後の奔流のような民友社単行本群なのでもある。あれだけのものを、まるごと自ら全否定しているのだ。

しかし、逆に考えてみよう。もしも、「緑亭主人」が角田柳作ではなかったと仮定しよう。角田柳作は、民友社を去った後、京都・福島・仙台の中学で教鞭を執り、まもなくハワイに渡り、さらには没するまでの長期間をニューヨークで過ごした。「緑亭主人」角田柳作でなかったとすれば、「緑亭主人」は東京で何十年かの活動を行い、晩年の余生を過ごしたはずである。であったとすれば、どこかで、「緑亭主人」が誰であるか、誰かが証言していたはずではなからうか。

角田柳作のように、ほとんど東京と関わりを持たぬ人物だったからこそ、「緑亭主人」の実名は不明のまま残されたのだ。

角田柳作は、コロンビア大学に日本語の書籍を収集するために、何度か帰国した。そして、恩師の坪内逍遙を初め、五十嵐力などの早稲田大学関係者と対面している。そういう歓迎会の席上、角田柳作の過去を知る人々が「緑亭主人」時代の角田柳作について一言も触れていないのは、惜しまれる。本人が否定しようとしていた過去を、あえて穿り出すような意地悪さは、彼らにはなかったのだらう。

【明治青年の文人魂を最後まで持ちつづけた角田柳作】

緑亭主人の著作は、観念的な精神論ではない。自然崇拜から仏教への一大転換、古代社会から王朝摂関体制への移行、貴族階級から武士階級への権力の移行、町人による経済活動の増大など、歴史の大きな節目節目をきちんと押さえている。そのうえで、歴史に流された人物を批判し、歴史に抗して古代の復活を目指した人物を称賛している。

古代から近代までの「日本人の精神史」の変遷を、これまた古代から近代までの「歴史の変革期」とからめて考察した独特の角田柳作の文明史観は、初期の著作で確立している。また、コロンビア大学でキーン氏たちを育てた名講義録と、「緑亭主人」名義の著作群は骨格が一致するものである。

ただし、「緑亭主人」の筆名を捨てた後の角田柳作の興味は、次第に文学者たちから思想家たちへと移っていった。また、「明治」という世界的に特殊な近代がいかにして成立したかという理由を、江戸時代の思想家たちに求める点に、大きな力が注がれた。これは、現在の比較文学研究の先駆けをなす発想である。しかも、最も偉大な角田柳作の弟子が「文人・ドナルド・キーン」であることが端的に示しているように、教育者へと転身してからもなお、角田柳作は最後まで一流の「文人の魂」を持ち続けたのである。

【角田柳作の没後四十年】

本稿を執筆しているのは二〇〇三年秋であるが、活字となって発表されるのは二〇〇四年春であろう。奇しくも、没後四〇年に当たる。ということは、まだ四十年しか経っていないのだ。角田柳作は、東京オリンピックの閉幕した直後の一九六四年十一月二十九日、長男の住むハワイで没した。

角田柳作の「緑亭主人」「緑亭生」「中龍児」名義の著作群は、明治二十九年か

ら三十年にかけて書かれた。これらの単行本群の「著作権」は、まだ切れていない。

明治という時代は、若者に活躍する場を与えた時代であったことが、改めて痛感される。そして、明治の精神の体現者が、つい最近まで健在だったことにも思及ぶのである。

明治二十九年に彗星のように文壇（論壇）に登場して、翌年に彗星のように文壇から消えた角田柳作。彼のその後の長い人生は、その著述活動を昇華させたものだった。

明治三十年に消えた「緑亭主人」は、樋口一葉とも似ている。一葉は、中央文壇で一瞬の光芒を放った後、明治二十九年に没した。「天才」と呼ばれた一葉も、言文一致の口語文ではなく、文語文を基調としていた。もしも、彼女が長生きできたとしたら、「文語文での自己表現に適合するタイプの文学者」が、どのように「言文一致の口語文」の津波に抵抗できたか、どのような文体の変遷を辿ったか、格好の分析材料を残してくれたに違いない。

角田柳作は、「文語文の消滅」という日本語の大きな転換期に、文語文に殉じたかのように沈黙した。樋口一葉に余生があったら、どうしただろうか。歴史に「もしも」という言葉はないが、興味をそそって止まない。

### 3 中龍児は、「緑亭主人」≡「緑亭生」と同一人物である

【これからの論証の手続き】

本稿の最終目的は、「緑亭主人」「緑亭生」「中龍児」「無記名」で書かれた以下の書物が、すべて角田柳作の著述であることを証明することにある。

不幸にして、角田柳作本人が過去を抹殺したので、青春期の著述について、何らの証言を残していない。また、日本を長く去っていた角田柳作について、周囲の証言もない。民友社と関わった数々のジャーナリストのエッセイに、何らかの記述がないかと思っ探したが、まだ見つかっていない。群馬県の角田本家の調査には大きな希望を持っているが、まだ許可が得られていない。

よって、残された単行本の表現をひたすら凝視して、「内部徴証」としては、すべての単行本の著者が同一人物であると強く推定される、ということ論証したい。

・ 緑亭主人『紫式部』	明治二十九年十一月五日	民友社
・ 緑亭主人『清少納言』	明治二十九年十二月二十二日	民友社
・ 中龍児『詩人西行』	明治二十九年十二月二十三日	民友社
・ 緑亭主人『雲井龍雄』	明治三十年一月十九日	民友社
・ 緑亭生『兼好法師』	明治三十年四月二十二日	民友社
・ 角田柳作『井原西鶴』	明治三十年五月二十一日	民友社
・ 無記名『日本文学梗概』	明治三十年七月二十三日	民友社

「緑亭主人」と「緑亭生」とが同一人物であることは、間違いないので、その論証は省略する。すなわち、「緑亭主人」≡「緑亭生」という出発点に立つ。

最初に、「中龍児」という筆名が最も「緑亭主人」あるいは「緑亭生」とは見目が離れているので、「中龍児」が「緑亭主人」≡「緑亭生」であることを論証したい。これが証明できれば、「緑亭主人」≡「緑亭生」≡「中龍児」となる。

その次には、角田柳作の名義で民友社から刊行された唯一の著書である『井原西鶴』が、「緑亭主人」≡「緑亭生」≡「中龍児」と同一人物の文体であることを論証する。これによって、「角田柳作」≡「緑亭主人」≡「緑亭生」≡「中龍児」となり、主要な証明が終わる。

最後に、無記名の『日本文学梗概』が、「角田柳作」≡「緑亭主人」≡「緑亭生」≡「中龍児」と同じ著者であることを論証する。

これで、決定的な証拠には欠けるものの、本稿執筆の主要目的は達せられる。この証明が終わった後で、初期の著作である『紫式部』と『清少納言』を改めて読み直す。そして、角田柳作の初期思想の本質に迫りたい。

では、中龍児『詩人西行』が、他の単行本と一致する箇所を列挙してゆくことにする。最初に『詩人西行』の頁数と、そこに記されたキーワードないしキーワードを指摘する。そのうえで、他書に表れた同一のキーワードないしキーワードを挙げる。このことで、中龍児『詩人西行』が、緑亭主人の著書であることを確認してゆきたい。単調な列挙作業を、諒とされたい。

(1) 一頁「紅花緑柳」は、『清少納言』一五頁などと一致する。「紅花緑柳」が、「緑亭主人」という筆名・戯名と関わるであろうことにも注意を喚起しておきたい。同時に、それが四字熟語であることにも、留意したい。四字熟語は書き手の

嗜好を表すことが多く、書き手の書き癖を示すからである。

(2) 一頁・五頁の「宇宙を大観する」は、『兼好法師』一頁や『清少納言』八七頁などにあり、緑亭主人の世界観や文学観の根本をなすものである。特に、『兼好法師』の冒頭にあることは、『詩人西行』の冒頭部にあることとも関連する。冒頭部での書き始め方の一致を示しているからである。

なお、宇宙を大観するという発想は、緑亭主人に限らず、民友社の基本思想でもある。ただし、他の民友社関係者は英文学の影響を濃厚に受けていて、ワーズワースなどの自然観を踏まえるのに対して、「緑亭主人」角田柳作は「日本の古典文学（古代文学）」をベースとしているのが特色である。民友社のメンバーの中で、唯一、日本の古典を論じることができたのは、緑亭主人であった。それが、二十歳の青年だったというのが、運命の巡り合わせだった。東京専門学校が「英語」だけでなく、「和文」教育に力を注いだ結果、角田柳作のような逸材が誕生し得たのである。

(3) 三頁・二二頁・六六頁「錦心繡腸」という四字熟語は、『紫式部』二四頁などに無数にあり、これも典型的な緑亭語である。

ちなみに、緑亭主人の著書に頻出する特徴的なキーワードを、これからは「緑亭語」と呼ぶことにする。あるいは「緑亭詞」と呼ぶべきかもしれないが、「緑亭語」と命名しておく。緑亭語の特質は、漢語の使い方であり、中でも四字熟語である。さらに言えば、比喩表現の多用である。

実は、「錦心繡腸」という緑亭語の初出は、東京専門学校卒業文集『へだてぬとも』の序文である。この名文を、わたしが角田柳作の執筆と推定する根拠の一つでもある。

(4) 三頁・三九頁「金声玉振」という珍しい四字熟語は、『紫式部』二七頁・三九頁などにある。

(5) 五頁・七三頁で、西行法師の道心が「生まれながらの先天的なもの」とするのは、『兼好法師』一三頁の叙述と完全に一致する。人間の道心が、先天的なものか後天的なものかという認識は、きわめて重要であり、書き手の思想の根幹を形成するものである。『兼好法師』と『詩人西行』とが同一著者の同一構想によって記されたものであるということが、よくわかる。緑亭主人の複数の著書には、思想の混乱は見当たらない。

(6) 五頁「羈束」は、他の書き手の文章にもしばしば見られる通常語（一般語）ではあるが、『紫式部』二二頁、『兼好法師』四五頁などにもある。緑亭主人の好

みの用語なのだろう。

(7) 西行の二十三歳における出家を五頁で「第二の変身」と述べるが、まさに角田柳作も満二十歳にして「第二の変身」を遂げた。むろん、単行本を量産する文筆家から、ほとんど著作を残さない教育者への変身である。

(8) 七頁「廷寮」は、『兼好法師』二頁などにある。どちらも朝廷に奉仕する「宮仕え」を意味している。

(9) 九頁・七〇頁の「朝紅顔、夕白骨」は、『井原西鶴』四九頁・六六頁などと共通する発想である。『和漢朗詠集』所載の有名な漢詩を引用している。

(10) 二二頁「灰の如き」、および一三頁「死灰の如き」は、『清少納言』六七頁などにもある。比喩表現（特に直喩表現）は、四字熟語と並んで書き手の個性を最も反映しやすい修辞である。直喩表現の一致は、その具体例が増えれば増えるだけ、「同一著者の文章」であることの証拠となるだろう。

(11) 二頁「花の如く雪の如き、愛女」や四〇頁の「高潔、雪の如く」は、『紫式部』一四頁の「雪の如く高潔、花の如く純美也」と共通する。これも、直喩表現が一致している例である。

(12) 一六頁「柳烟」「柳糸」は、角田柳作の好んだ表現である。おそらく、「柳作」という名前を持つているために、「柳」という漢字を含む熟語を愛したのだろう。角田柳作の本名で書いた初期のエッセイにも、「柳母慈母」がある。前橋中学の同窓会誌に書いたものだが、未見である。なお、『詩人西行』の二二頁・四〇頁では、「煙柳」。四〇頁では、「柳条」ともある。

(13) 一六頁「山水秀霊の地、能く偉人を生ず」は、『雲井龍雄』一頁の「羽北の山河。巍然として高く。滾々として長し。秀麗天を擲するものあり。碧流深淵を穿つものあり。山の靈、河の偉、共に是れ、偉人傑士の揺籃にあらずして何ぞ。果然米沢の地。一偉人を出だす」という文章と一致する。

なお、民友社の影響を受けて廃娼運動を展開した『上毛之青年』の明治二十九年十二月号の無署名記事にも、同一の表現と思想が見える。上毛は、古来、山紫水明の土地とされ、群馬出身の角田柳作はこの思想を幼少から培っていたのではないが、『上毛之青年』では、偉人を出すべき山水秀麗の地であるにも拘わらず、上毛からは目立った文学的偉人が輩出していないことを、書き手は嘆いている。この文章の書き手が、民友社で単行本を陸續として出版中の「角田柳作」緑亭主人ではなかったか、とわたしには思われてならない。角田柳作は、「上毛の山河が生んだ偉人として、この角田柳作がいるぞ」と名告りを上げているのだ。

(14) 一九頁「詩想」は、『清少納言』四六頁にもある。普通の批評語彙ではあるが、同種の事例が集積すれば、書き手の同一性の傍証にはなる。

(15) 二〇頁・六二頁「インスピレーション」は、『紫式部』五頁などにある。もとは、民友社の総帥である徳富蘇峰の用語かと思われる。緑亭主人は、徳富蘇峰に学び、それを吸収しつつ、蘇峰の視野にいない「日本の古代」を踏まえて、独自の批評基準を確立してゆく。すなわち、日本の古代文明論において、角田柳作は徳富蘇峰をも超え、民友社随一である。

(16) 二二頁「孤筇」(一本の杖という意味)は、『兼好法師』一七頁にあるだけでなく、角田柳作の「辞世」とされる漢詩にもある。二十歳と八十二歳とで、同じ熟語を用いたことは、この「孤筇」という言葉が、「緑亭主人」角田柳作の心の奥底に巣食っていたことを物語る。一言で言えば、「旅への誘い」である。

日本・ハワイ・ニューヨークと、角田柳作は一本の杖を引いて旅する孤独な旅人だった。それは、旅に生き旅に死んだ西行・宗祇・芭蕉の人生のかたちであり、兼好伝説を発掘した角田柳作にとっては兼好の死のかたちでもあった。

(17) 二五頁に「武蔵野」と「月」を関連つけた文章があるが、『紫式部』一頁の「紫の一と本ゆゑに武蔵野の月はみながら哀れとぞ思ふ」などと同じである。ただし、この「紫式部」の古歌の引用は、「武蔵野の草はみながら哀れとぞ思ふ」が正しく、緑亭主人は記憶違いをしている。それだけ、緑亭が「武蔵野」と「月」を一体視しているからである。単なる誤植とは、考えない。武蔵野の月が、原から出て原に入る、という古歌が脳裏に焼きついているのだらう。

(18) 二五頁の「虫声唧々」という四字熟語は、『紫式部』七九頁などにある。

(19) 二九頁の「長亭短亭」という四字熟語は、『井原西鶴』一一七頁などにある。

(20) 三〇頁「孤鶴白雲」という四字熟語は、『兼好法師』三三頁などにある。

(21) 三〇頁から三一頁にかけての「末糸の露」は、『兼好法師』三〇頁などにもある。どちらも、「末の露本の雫や世の中の後れ先立つためしなるらむ」という古歌を踏まえている。

(22) 三七頁で、西行をめぐって巷間に語り伝えられている「伝説」を一概に退けずに、彼の人間性を端的に示すエピソードとして位置つけて考察するのは、『兼好法師』で荒唐無稽とされる兼好伝説を、水谷不倒の批判にかかわらず取り上げた姿勢と一致する。すなわち、伝説の中に真実を見ようとする姿勢である。

(23) 四〇頁の「千里の天空、一転の雲影を容るさず、萬頃の煙波、半波の浪を揚げず」は、角田柳作の「辞世の漢詩」の中に見える「青空東海に連なる」「七

千里」などと共通するイメージである。角田柳作のセルフ・イメージとして、自らを西行に擬する意識が強かったのであろう。

(24) 四二頁「鉄中の錆々たるもの」という慣用句は、『紫式部』二頁などにある。(25) 四四頁・五一頁などの「炬の如く」という直喩表現は、『紫式部』三八頁などにある。

(26) 四六頁から四八頁にかけて、「太古」と「王朝」の二つの思想を併せ持つ中世人として、西行像が描かれる。『清少納言』では、「王朝」にあつて「古代」太古の精神を体現していた清少納言像が描かれる。厳密には少し違っているが、同じような説明様式であり、同一の思考パターンが表れている。

(27) 六一頁の「煙の如き一縷の命脈」という直喩表現は、『清少納言』一頁と似る。

(28) 六五頁の「出藍の誉れ」という諺は、『井原西鶴』七一頁や一〇八頁にもある。

(29) 七〇頁の「方丈記」の引用は、『井原西鶴』一頁にもある。

(30) 七一頁の「醉生夢死」という四字熟語は、『井原西鶴』七〇頁・一六七頁・一七一頁などにもある。

(31) 七三頁「東海」は、角田柳作の「辞世の漢詩」にある。

(32) 七三頁で西行を「寒僧」と述べるのは、『兼好法師』一頁で兼好を「寒法師」と述べるのと類似する。

(33) 七三頁で、中国から輸入された「仏法の観念」が、日本の古代精神を大きく変えたという歴史観が提示される。これは、『清少納言』一〇頁などと共通する緑亭主人の古代文化についての基本認識である。

また、後年の角田柳作のコロンビア大学における日本思想史の講義の基本理念ともなっている。角田柳作の日本思想史の大枠は、二十歳の時に既に出来上がっていたものと思われる。

(34) 七五頁で「煩惱」を「煩惱」と誤記するのは、『紫式部』二二頁と同じ。著者の書き癖か、印刷所のミスか、二つの原因が考えられる。

(35) 七八頁「崇高絶対の思想」は、『清少納言』六頁「崇高の観念」「莊重の理想」と類似する。

(36) 七九頁の「立命安心」という四字熟語は、『兼好法師』四七頁などにある。

(37) 九六頁の「清風明月」という四字熟語は、角田柳作の「辞世の漢詩」にもある。『詩人西行』では、西行法師が死を迎える心境の比喩となっている。まさ

に、角田柳作も、死を目前にして、西行法師の「清風明月」の心境を自分のものとして実感したことだろう。

なお、既に述べたことだが、角田柳作の同じ辞世の漢詩にある「青空東海」の「東海」という言葉も、『詩人西行』七三頁や、『井原西鶴』一〇七頁にある。「青空」は、「碧空」などとして、諸書に見える。

以上の点から、『詩人西行』を著した「中龍児」は、「緑亭主人」と名告る人物と同一人物であることが、ほぼ確実に証明できたと考える。

なお、『詩人西行』奥付には、著者の住所が明記されている。「東京市芝区伊皿子町五十八番地」である。この住所は、角田柳作が本名で、『井原西鶴』を著した時の奥付の住所である「東京市本郷区駒込追分町七十二番地 内田方」とは異なっている。

東京専門学校在学中、および卒業直後の角田柳作の居住地については、何も証明するものはない。ただし、緑亭主人名義で著した『雲井龍雄』の巻末に付された「備考」では、著者自らがあつた日、芝二本松の上行寺と円心寺を訪ねて、雲井龍雄の旧跡を探し求めたことが記されている。ここで気づくのは、芝の伊皿子町と二本松とが、歩いてすぐの地点であるということである。

『詩人西行』は明治二十九年十二月、『雲井龍雄』は明治三十年一月、そして『井原西鶴』は明治三十年五月である。角田柳作は、明治二十九年から三十年の初めにかけて、芝区に住んでいて、その後、五月までに駒込に転居した、と考えると納得できる。

#### 4 角田柳作『井原西鶴』と、緑亭主人名義の著作との一致点

それでは、本稿の最も大切な論点に移ろう。「緑亭主人」「緑亭生」「中龍児」という三つの筆名を駆使した人物の本名は「角田柳作」であろう、という推定の根拠を列挙してゆきたい。

それは、角田柳作名義で著した『井原西鶴』と、他の著作群との表現・思想の一致点・類似点を指摘することで、おのずと証明されるのではなからうか。既に指摘した類似点が重複している箇所があるが、それぞれの証明問題における「類似例数」を漏らさずカウントするために、あえて重複を避けなかった。諒とされ

たい。

以下で「緑亭語」と呼ぶのは、角田柳作の著作に頻出するキーワードであるが、彼が属した民友社の人々の著述に頻出する「民友社語」でもある。それらの「民友社語」は角田柳作以外の民友社関係者にも使われている。ただし、四字熟語や比喩表現を頻出させ、漢文調で格調高く、同時に外来語をカタカナで多用するという独特な文体は、まさに「緑亭語」の世界である。「角田柳作」という文学者・思想家の強烈な個性を感じさせる。彼は、既に二十歳にして、自分の世界を構築しおえている。

(1) 序文二頁や本文一六三頁に見える「鬱勃」は、『紫式部』二八頁などであり、緑亭生のキーワード。すなわち、緑亭語である。著者の心に抱え込まれた「鬱勃」の情が、文学を生み出す基盤となると考えてみる。

(2) 序文三頁の「本書では西鶴の長所だけでなく、欠点も書く」という決意は、『清少納言』一一四頁に引用されているマコーレーの言葉と一致する。人物評伝は、論じる対象の人物のプラスとマイナスの双方を描き込んで初めて、一流のものなるといふ基本姿勢である。この点を誠実に実践した角田柳作は、井原西鶴とこの人物のプラス面よりもマイナス面を多く指摘することとなってしまった。清少納言の場合には、プラス面が多かったのだが。

それが、井原西鶴の近代性を高く評価する国文学者たちの反発を買い、『井原西鶴』は西鶴研究の最初の単行本ながら、その価値が学界から黙殺される結果を招いた。国文学者が高く評価する西鶴の「写実性」は、角田柳作の目には頹廢した時代への埋没と映る。

(3) 本文一頁で鴨長明の『方丈記』の冒頭の一文が引用されているのは、『詩人西行』七〇頁などと重なる。余談ながら、まだ大福光寺本が広く紹介されていないので、『方丈記』の文章は、現在の高校生が古文の時間に学習する文とは違いいわゆる「流布本」系統に属する。夏目漱石が、大学生時代に英訳した『方丈記』もまた、流布本だった。

(4) 二頁の「卓厲風発」という四字熟語は、『紫式部』一一頁、および『清少納言』三六頁・八一頁、さらには『雲井龍雄』二頁などに見られる。「緑亭語」である。

(5) 三頁の「底」は、普通には「体の」と書くところ。この「底」は、『紫式部』三八頁などにある。「角田柳作＝緑亭主人」の書き癖だろう。

(6) 三頁・七二頁・一〇九頁の「出藍の誉れ」という諺は、『西行法師』六五頁などにある。

(7) 三頁の「鉄中の争々たるもの」という慣用句は、『紫式部』三頁などにある。諺と言い、慣用句と言い、四字熟語と同じく、書き手の教養を示すメルクマールである。

(8) 六頁に、「八州」とある。『詩人西行』の二五頁や三三頁などにも、「関八州」という言葉がある。これらの「関八州」は関東という意味でなく、「日本中」という意味で用いていると思われる。「関八州」八州。すなわち、『井原西鶴』の用例と一致している。

(9) 一二頁の「文界」は、『清少納言』一頁・三頁・九三頁などにある。類義語の「文海」は、『紫式部』一一九頁などにある。

(10) 一一頁・五三頁・九三頁に見える「千紫万紅」という四字熟語は、『紫式部』でも二頁などに、『清少納言』でも二〇頁などに何度も用いられている。『詩人西行』一七五頁にも、類義語の「千紫百紅」がある。

角田柳作がハワイに渡ってからのエッセイ集である『書齋・学校・社会』の一七五頁にもある。典型的な「緑亭語」である。

(11) 一二頁や一九頁の「梗概」という語は、角田柳作の著書と強く推定される『日本文学梗概』とも響き合う。『紫式部』一三〇頁以降にも、「源氏物語梗概」が付載されているのが、大切である。「緑亭主人」角田柳作は、必ず古典文学作品の梗概を示してから、その本質を説き始める。

作品の要約、すなわちダイジェストには、書き手の理解力と読解力とが、正直に反映する。緑亭主人の梗概の仕方は、ある意味では退屈だが、簡潔である。

(12) 一四頁で「局所」と「全編」とを対比させて作品を論じているのは、本書の九五頁や一三八頁にも繰り返されているが、『清少納言』七二頁などにも見られる。角田柳作の根本的な文学観の問題である。全体は局部の中に宿り、局部は全体を凝縮している。だからこそ、それぞれの時代を生きた個別の人物の評伝を書き記すことで、日本文化の全体が迎えられるというのである。

(13) 一六頁に『源氏物語』の「雲がくれ」の巻の論について述べる箇所がある。巻名のみ残り本文が残らない雲隠巻に関しては、さまざまな立論がなされてきた。角田柳作名義の『井原西鶴』の趣旨は、緑亭主人名義の『紫式部』六八頁と一致している。

(14) 一六頁の「活動」という語は、『紫式部』四二頁などにもある。精神活動の

意味で用いられている。

(15) 一七頁の「宇治十帖」と「正編」の対比は、『紫式部』七〇頁から七三頁までの記述と重なる。宇治十帖を「悲観的」でもの悲しい世界と規定しており、『源氏物語』の全体像に対する大局的な把握が、角田柳作名義と緑亭主人名義とで一致しているのである。

(16) 一八頁「呪へし」は、「呪ひし」が正しいが、動詞の活用形の間違ひは、彼が上州人だったことと関係があるかもしれない。

なお、動詞の活用形の混同は、緑亭主人名義の諸書に見える。

(17) 一五頁や三九頁に、「百尺竿灯一步を進める」という諺が用いられている。この諺は、『紫式部』六九頁などにも見える。

(18) 三一頁の「松柏のひとり青きが如く」という直喩表現は、『兼好法師』六五頁などと、ほぼ一致している。

(19) 三二頁の「燃ゆるがとき」という直喩表現は、よくある措辞ではある。ただし、『兼好法師』一五頁や『雲井龍雄』四五頁などと一致することから考えれば、角田柳作の書き癖であろうと推定される。

(20) 三三頁の「連璧趙玉」は、『清少納言』一〇〇頁や『詩人西行』四三頁で述べられている。「卞和の玉」と同じ璧を意味している。

(21) 三三頁の「ペルソナリチー」は、『紫式部』一〇六頁と一致。外来語の分析用語は、角田柳作が東京専門学校で学んだ坪内逍遙の影響かもしれない、民友社の徳富蘇峰の影響かもしれない。

(22) 三五頁や一〇〇頁の自然観は、『兼好法師』四七頁などと一致するだけでなく、角田柳作の日本人の心の歴史に対する基本認識である。一つの時代の文学者・思想家を論ずる場合でも、必ず古代にまで遡って日本人の心性と自然観を説き始め、それが王朝・中世・近世でどうなったかを、大胆に見通してしまう。また、「古代の心性の復活」として清少納言を位置づけたり、古代精神の部分的な復活として西行を評価する姿勢とも通じる。

古代人の心性を端的に示すキーワードが、「日月星辰、山川草木」への畏怖の念である。ドナルド・キーンの回想にも、角田柳作が古代人の太陽や山などに対する尊敬の念をコロンビア大学での講義で強調してやまなかった、とある。

(23) 三五頁の「肉」は、『兼好法師』四〇頁などとほぼ一致する。

(24) 四二頁の「二個の中心点」は、『兼好法師』四三頁などと一致する。要するに、楕円形的な世界観ということである。世界を単一の中心で説明せずに、対立

する二つの価値観の葛藤として把握しようとするものである。

なお、晩年の角田柳作は、母校・前橋高校で行った講演で、「三」という数字の大切さを強調している。青年期の二項対立的な世界観から、彼が思索の末に脱却したことを物語っている。

(25) 四六頁の「趣味」は、『紫式部』八頁などにも見える。

(26) 四九頁「老ひ」は、ヤ行の「老い」が正しい仮名遣いだが、『雲井龍雄』一五頁などでも「老ひ」とある。また、「……においておや」と誤記した箇所も、諸書に見える。歴史的かなづかいの間違い方においても、緑亭名義と角田柳作名義とで共通しているのが、興味深い。

(27) 四九頁や一四四頁の「朝露夕電」は、『兼好法師』四四頁・四六頁などにある。

(28) 四九頁・六六頁の「紅顔」と「白骨」の対比による無常観の表出は、『詩人西行』九頁などと内容的に一致する。

(29) 五一頁の「武蔵野の月」は、『紫式部』一頁などと一致している。

(30) 五九頁・八八頁・一四六頁などに見られる「悲哀」と「滑稽」の対比は、『紫式部』五八頁にも見られる。坪内逍遙の影響だろう。

(31) 六〇頁の「冷観」という言葉は、『清少納言』七五頁の「冷評」と近い。

(32) 六一頁の「乱麻」は、『雲井龍雄』一頁にもあり。

(33) 六五頁に述べられている「一見すると不道德だが、真実のところは道徳的である」という逆説は、『紫式部』一三―一四頁にもある。緑亭主人の『源氏物語』観の根本をなすものである。そもそも、『紫式部』という書物は、男女関係が退廃的な時代にあっても高潔を保った紫式部を称賛し、『井原西鶴』は退廃的な時代にあっても本人も退廃した西鶴を批判するという、対照的な主題をもっている。両者は、ほぼ同時に構想され、緑亭主人の『日本文学全史』を完成させたのではなからうか。

『紫式部』の裏返しは、『井原西鶴』である。つまり、両著は同じ文学観の反映である。

(34) 六六頁の「咨嗟」は、『詩人西行』三二頁の「咨嗟」と同じであろう。

(35) 六九頁に見える「青柳」という言葉は、「緑亭」という筆名と関わりとかわれる。

(36) 六九頁の「極真極美の霊境」という言葉は、『紫式部』のテーマと一致する。観念的・抽象的な美学であり、民友社の若者たちが熱に浮かされたように用いた言

葉である。ただし、角田柳作は、この観念を「日本人の古代精神」として位置づける。この点が、他の評論家たちと違っている。

(37) 七〇頁や七一頁の「醉生夢死」という四字熟語は、『詩人西行』七一頁などと一致する。

(38) 七五頁で、西鶴を指して「徳川文壇小説家の殿」と言つのは、『兼好法師』三二頁で兼好法師を指して「殿將」と呼ぶことと一致する。「さきかけ」の美学ではなく、「しんがり」の美学である。

(39) 八一頁の「雁」は、『詩人西行』一六頁と少し似ている。東京専門学校の卒業文集でも、友人たちの集合を「雁行」に喩えていた。

(40) 八三頁「あさぢうの宿」は、『紫式部』の蓬生の巻の論と重なる。ただし、正確な仮名遣いでは、「あさぢふの宿」とならねばならない。歴史的仮名遣いの混乱は、角田柳作に限ったことではなく、明治時代全体の特質である。だが、角田の書き癖を表している可能性があるため、あえて指摘しておく。

(41) 八三頁の「富岳」は、『詩人西行』二四頁などにもある。むろん、富士山のことである。

(42) 八五頁や一一四頁に使われている「翱翔」という難しい熟語は、『雲井龍雄』一五頁などにもある。もしかしたら、角田柳作が東京専門学校で学んだ漢文学の講義で学習・記憶した漢語なのかもしれない。

(43) 八八頁の「鬼神をふるはせ」は、『紫式部』一頁と類似する。

(44) 九四頁の「黒雲」は、『雲井龍雄』一九頁にもある。このような平凡な熟語でも、角田柳作と緑亭主人の同一性を証明する用例になると思うので、数えただてているわけである。

(45) 九四頁の「駘蕩たる春風」は、『紫式部』六一頁などにもある。角田柳作の卒業文集『へだてぬとも』にも、ある。空つ風の厳しい群馬県の渋川で育った角田は、「春」に寄せる思いを「駘蕩」という漢字熟語で表現している。

(46) 九六頁の「多血多情」は、『兼好法師』一五頁などと類似する。角田もまた、青春の熱き血を滾らせて、文芸批評を展開していた。

(47) 九九頁の「花は自ら紅く柳は自ら暗く」という慣用句は、『清少納言』一五頁などにある。「花は紅、柳は緑」とも関連し、「緑亭」という筆名の由来を示すものだと想像される。

一一一頁の「楊柳」も、『清少納言』四頁や『雲井龍雄』五頁などにある。

(48) 一〇五頁や一五五頁などの『源氏物語』への言及は、『紫式部』での叙述と

基本的に重なる。ただし、半年前の『紫式部』から新たに考察を深めた点も、多い。半年間に六冊もたてつづけに本を著した角田柳作の「執筆行為を通しての思索の深まり」をうかがわせる。

(49) 一〇五頁における「枕草子」への言及は、『清少納言』での叙述と基本的に重なる。ただし、具体的に引用された章段を比較してみると、『井原西鶴』一〇六頁の「祭の頃は」の段は、『清少納言』では引用されていなかった点が若干気になる。

(50) 一〇七頁「東海」は、角田柳作の辞世の漢詩に用いられた「東海」と重なる。

(51) 一一〇頁の「Simple」という外来語は、『紫式部』六七頁の「モノトナス」とほぼ同じ意味である。

(52) 一一六頁で西鶴の文学を「夏」という季節に喩えるのは、『雲井龍雄』八八頁と似る。夏と冬の二項対立図式の中での「夏」という認識である。

(53) 一一八頁「人は依然として四肢の蠹虫」とある隠喩表現は、『詩人西行』五頁などの「蠕虫」と類似する。

(54) 一一九頁の「一票」という漢語は、『詩人西行』六七頁などにもある。

(55) 一二〇頁の「不如意」という言葉は、『紫式部』四〇頁などにもある。

(56) 一二二頁の「胡風一陣」という四字熟語は、『雲井龍雄』一二二頁などと類似する。

(57) 一二三頁の「空爵」は、『詩人西行』六三頁などの「飯爵」と同じ意味である。人間の最終的な幸福は、「空しい官位官職」ではなく、精神的な満足感なのだ、という幸福感の表明である。ここに、最後まで世俗的な立身出世を求めなかつた角田柳作の強い意志を感じさせる。

(58) 一二三頁での「鎌倉公」(源頼朝)に対する低い評価は、『雲井龍雄』八五頁などと一致する歴史観・人物観である。また、緑亭主人の小説『花源氏』が、源氏の遺児を描いていることと対応するかもしれない。

(59) 一二三頁で豊臣秀吉を「猿面冠者」と呼ぶのは、『雲井龍雄』八六頁と類似する。

(60) 一二五頁の「絶叫」という熟語は、よくある普通語だが、『兼好法師』四五頁や『詩人西行』八一頁などにもある。角田柳作の、書き癖であろう。

(61) 一二七頁の「長亭短亭」という四字熟語は、『詩人西行』二九頁などにもある。

(62) 一二九頁の「紅燈銀燭」という四字熟語は、『清少納言』二七頁などにもある。

(63) 一三四頁の「蹉跎」という漢語は、『紫式部』三三頁などにもある。

(64) 一三七頁の「慈母愛兒」という四字熟語は、同書の五〇頁にもあるが、『清少納言』一六頁などと共通する。幼くして実母と死別した角田柳作の「母への思い」の強さを示すものである。ちなみに、ハワイ時代の角田柳作は、「柳母学人」という筆名を使っていたと言われる。

(65) 一四〇頁の「婦道」は、『紫式部』一五頁や一二七頁などにもある。「婦徳」と同義語である。そもそも、『家庭雑誌』誌上や、その別冊付録で、婦女子の教訓として、「婦道」の見本としての紫式部や清少納言について語るのが、角田柳作の著述活動の出発点だった。

(66) 一四二頁の「紅熱」という熟語は、『紫式部』一〇七頁にもある。

(67) 一四三頁の「ひたすらに」は、「いたすらに」の間違いである。これは、おそらく誤植ではなくて、北関東出身の角田柳作の言語感覚(訛り)のなせるわざなのではないか。

「い」と「ひ」の混同は、『兼好法師』一一頁や三四頁などにもある。また、「し」と「ひ」の混同は、『清少納言』一八頁などにもある。

以上、六十七の類似箇所を数え上げてきた。これらの点から考えて、「角田柳作」は、「緑亭主」「緑亭主人」「中龍児」である、と断定してよいのではない。これほど似通った文体を、別人が書いたとすれば、その方がむしろ不自然である。今は、言葉に絞って類似点をあげるに留めたが、もしも全体を通読してみたら、「類似」の印象は限りなく高まることだろう。

よって、「内部徴表」あるいは「表現論」では、緑亭主人の本名が角田柳作であることは、限りなく百パーセントに近い蓋然性で主張することができる。

## 5 『日本文学梗概』の著者は、角田柳作である

ここで、著者名を明記しない『日本文学梗概』が、緑亭主人・緑亭主・中龍児名義の著書と同じように、角田柳作の手になるものである論拠を、示しておこう。本書の圧巻は、全体の約半分の紙数を費やした「古事記」の梗概である。著者



は、神の名前や記紀歌謡をほとんど網羅して、解説してゆく。後年のコロンビア大学での講義において、角田柳作は神話に登場する神々の名前を重視したというその姿勢が、早くも『日本文学梗概』に見られるのである。

また、それだけでなく、緑亭主人の本質である「古代精神の賛美」もまた、独自の緑亭語を用いて語られている。例えば、『竹取物語』について論じた八五頁の「古代志想の純潔」(「古代思想」の誤植であろう)、「霊筆自在」という言葉は、緑亭主人の文体・語彙と一致する。

また、『古事記』について述べた二〇四頁で、古代思想が「純情」「高潔」であるとする点、また「花の如く雪の如き、高潔」とする比喩表現は、典型的な緑亭語である。

短い解説の後につづく長い梗概部分は、いささか退屈であるが、解説に照らし合わせて、この著作が紛れもなく「角田柳作」緑亭主人」だと認定できるのである。

## 6 緑亭主人『紫式部』の表現と思想

角田柳作の最初の著作と推定される『紫式部』の文体的特色としては、何よりも漢字四字の熟語が頻出し、格調がきわめて高いことが挙げられる。

また、文学史的把握としては、「古代」の日月星辰・山川草木に霊性を見出す日本人の本性から説き始め、大きな視野が指摘できる。かつ、王朝・鎌倉時代・室町時代・近世というそれぞれの時代で、「古代」を復活させようとしたり、取り入れようとしたりして、文学者たちは苦闘した。それぞれの時代と戦った「変革者」たちをテーマとすること、それが緑亭主人の文学批評の着眼点だった。

いつの世でも、天才は時代精神に制約されつつも、時代精神と異なる個性を自覚してきた。そして、時代と激しく戦ってきた。それが、彼らの「近代」の発見であり、普遍性への到達でもあった。ただし、『井原西鶴』のみは、時代に埋没した西鶴の精神が、激しく批判される。

では、『紫式部』における顕著な特徴を、列挙してゆこう。既に緑亭主人などの筆名が角田柳作のものであることを証明するために用いた材料が、かなり交じっている。それら重複する箇所は、それが取りも直さず、「緑亭主人」角田柳作」の反復される本性であると、「理解いただきたい。

(1) 一頁で、「武蔵野」と「月」の結びつきが語られる。角田柳作は上州人だが、雑木林の武蔵野の風土が肌合っていたようだ。あるいは、多摩川の流れの聞こえる武蔵野のほとりに、下宿していたことがあったのではないかとすら想像させるものがある。『家庭雑誌』の俳諧堂主人名義のエッセイを読むと(この「俳諧堂主人」もまた角田柳作の筆名の一つではなかったかと、わたしは強く推測している)、そういう空想が頭をもたげてくる。また、『詩人西行』一三五頁や、『井原西鶴』五〇頁などに、武蔵野の月が印象深く語られる。

(2) 一頁「鉄中の鏘々たるもの」という慣用句は、『詩人西行』四二頁や『井原西鶴』三頁などにも見られる。

(3) 二頁「千紫万紅」という四字熟語は、典型的な緑亭語である。『井原西鶴』一一頁、『清少納言』二〇頁、『詩人西行』一七五頁などに頻出する。さらに言えば、この「千紫万紅」は、角田柳作たちの学年の東京専門学校卒業文集である『へだてぬとも』の冒頭に置かれた序文にも見える。文体から推測して、この文集巻頭の序文も、角田柳作の執筆だろうと思われる。角田の美文家としての評価は、仲間うちでも高かったのではないが。

一方、早稲田大学に保管されている角田の学生時代の成績表では、論文(卒業論文)の成績が抜群というわけでもない。七十五点である。『早稲田文学』にこの年度の卒業生の「注目すべき論文」が紹介されているが、全体として七番で卒業した角田柳作の論文の具体的内容には触れられていない。不思議である。角田柳作の身について漢文調の文体は、教師の側から見るとある意味で空疎で観念的だということなかもしれない。あるいは、「老子」をテーマとして書かれた角田柳作の卒論が、彼の真骨頂を示していなかったのかもしれない。

(4) 一四頁の「雪の如く高潔、花の如く純美」という直喩は、『兼好法師』三八頁、『詩人西行』四〇頁、『日本文学梗概』一〇四頁にもある。

(5) 一五頁や一七頁の「婦徳」は、『井原西鶴』一四〇頁とも関連する。この『紫式部』という単行本が『家庭雑誌』付録であるというスタイルとも関連する。ただし、「俳諧堂主人」が本体の『家庭雑誌』に書いた『源氏物語』論を読むと、そちらがはるかに教訓的であり、批評性も低い。『紫式部』は、婦徳を顕彰するという目的を持ちながら、大胆な文芸批評書たりえている。

(6) 一九頁の「黄鸝」(うぐいす)という漢字表記は、『清少納言』四頁や八二頁などにも見える。あえて「鶯」という漢字を用いなかった点が、彼の漢文学へ

の造詣の深さを示している。

(7) 一九頁で述べられている「クジャクやウグイスは、美しさのために命を落とす危険性を持っている」というのは、角田柳作の卒論のテーマである。「莊子」の思想に近い。緑亭主人の著作にも、「莊子」に関する言及は多い。ただし、「莊子」についての卒業論文自体は抜群の成績ではなく、大学から教師として残るようになるという意思も受けなかった。自活する必要性に迫られていた角田柳作は、まず生活費を稼ぐために、「文筆で立つ」必要性があった。

(8) 一四頁の「錦心繡腸」という四字熟語は、『清少納言』四頁、『兼好法師』三八頁、『詩人西行』三頁・二二頁・六六頁などにも見える緑亭語である。『家庭雑誌』にも、しばしば見える言葉なので、民友社語でもあったのだろう。あるいは、無署名で『家庭雑誌』のその文章を書いた人物が、角田柳作だったということかもしれない。ちなみに、卒業文集『へだてぬとも』の序文にも、「錦繡」とある。語彙から推して、この部分が角田柳作の手になることは、ほぼ確実なのであるまいか。

(9) 一四頁で「俗説」を退けない姿勢は、『兼好法師』や『詩人西行』の著述の基本姿勢と一致する。

(10) 二七頁に、「不平発して」とある。怒りや鬱屈が、文章表現の母胎となるという認識である。この意味での「発す」は、『井原西鶴』一一七頁などに見られる。

(11) 二七頁の「金声玉振」という四字熟語は、『詩人西行』三頁などにもある。

(12) 二七頁で、「人は時代の産出児なり」と述べるのは、天才といえども自分が生きている時代精神の制約を受けるという意味である。同種の思想は、『井原西鶴』三五頁・四一頁・一四三頁などで繰り返し語られる。にも拘わらず、時代精神に埋没した人物は二流とされ、角田柳作から断罪される。時代を超え、古代を蘇らせるような強い個性が、高く評価されるのである。

(13) 二八頁の「鬱勃」。これも、文学の発生源を人間の不如意感に設定する思想の反映である。『清少納言』四頁、『兼好法師』七六頁、『井原西鶴』序文二頁などに、「この「鬱勃」という言葉は存在している。

(14) 三三頁の「蹉跎」は、『井原西鶴』一三四頁などにある。

(15) 三三頁「多情多血」は、『井原西鶴』一八二頁「多情多恨」と似ている。なお、「多情多恨」は尾崎紅葉の小説名だが、緑亭主人には尾崎紅葉への言及がしばしば見られる。紅葉文学をよく読んでいたようだ。

(16) 五八頁で「滑稽」と「悲哀」とが同居しているべきだという文学観は、『井原西鶴』五九頁・八八頁・一四六頁などと共通。

(17) 六八頁の「百尺竿頭更らに一歩を進める」という慣用句は、『井原西鶴』二五頁・三九頁や、角田柳作の翻訳『社会の進化』六九頁などにもあり、緑亭語だと見なされる。

なお、群馬における廃娼運動の中心雑誌だった『上毛之青年』は、民友社の徳富蘇峰と深い関係にあったと言われる。その明治二十九年十二月号に掲載された無署名記事には、「百尺竿頭更らに一歩を進める」という諺が見られる。この文章は、角田柳作の書いたものかもしれない。また、当該『上毛之青年』では、『雲井龍雄』と共通する、美しい山河は偉人を生み出すという自然観も述べられる。文体全体の類似もあり、「角田柳作」の執筆ではないかと思わせるものがあるのだ。さらに言えば、角田柳作は明治二十年八月発行の前橋中学の学友会誌にも一文を寄稿しており、前橋人脈とのつながりをうかがわせる。

(18) 一〇二頁の「不言不語」は、角田柳作のエッセイ『書齋・学校・社会』三七頁などにも見える。もとは、尾崎紅葉の小説のタイトルであり、紅葉文学の愛読者だったことを示すものだろう。

ここで、いささか意地が悪いことだが、緑亭主人『紫式部』に見られる内容の誤謬について、考えておかねばならない。緑亭主人は、これまで見てきたように、角田柳作の筆名だった。彼は、東京専門学校で日本文学を学んだ。関根直と今泉定介が、『源氏物語』の教師であった。しかし、何と云っても、角田柳作は満二十歳。まだ、『源氏物語』の定番とも言つべき入門書がなかった時代に、自力で『源氏物語』の概説と紫式部の人生を書き下ろすというのは、大変な作業だっただろう。だからこそ、いくつかの誤謬がある。

それを指摘するのは、角田柳作の理解の不足を批判するためではない。この時代に、『源氏物語』がどういふふう誤解されていたかを示すためであり、そういう誤読を誘発しやすい『源氏物語』それ自体の本質を発見するためでもある。角田柳作は、おそらく原文を『源氏物語湖月抄』で読みながら、必死に締め切りと戦いつつ、書き進めたのだろう。

(1) 三〇頁で八の宮の和歌を、「打捨てつがいきりにし水鳥の此の世にたちあくれけん」としている。「つがひ」は「つがひ」の誤写、「此の世に」は「かりの

此の世に」の脱落。

(2) 四三頁や一六一頁で「藤壺更衣」とするのは、「藤壺女御」の誤り。「桐壺更衣」と「藤壺女御」を混同しているのである。現代でも、「桐壺女御」と誤ったダイジェストをした本がある。

(3) 五九頁。光源氏が五条の陋屋で夕顔と同衾している場面を、「からからと鳴る神」とあるのは、原文では「こほこほ」。「田舎の光景」としているのは、都の五条の陋屋なので、不適当。このあたりは、ダイジェストか、漠然とした記憶で執筆しているのかもしれない。

(4) 七五頁で、作中和歌を、「山風に霞吹きとくこゑはあれど隔てゝ見ゆるをちの白浪」と引用しているのは、「川風」の誤り。

(5) 七七頁で、浮舟の継父を「常陸の守」としてのは、「常陸の介」の誤り。

(6) 八〇頁や一五四頁で、明石の入道のことを「良清入道」と述べているのは、光源氏の従者の一人である良清と、明石の入道とを混同したものだ。こんな大きな誤りを犯しているのは、それだけ緑亭主人が自力で『源氏物語』の原文のダイジェストに挑んでいるからである。

(7) 一三五頁で、光源氏と空蟬の最初の出会いを「節分の夜」とするが、これは誤り。

(8) 一四二頁で、「北山の僧都」を「北山の聖」の弟子としているが、本文ではそうは書かれていない。

(9) 一四四頁で末摘花の「乳母」の侍従が光源氏の応対をしたと書かれているが、正しくは「乳母子」。

(10) 一四五頁で、紅葉賀巻の冒頭を「桐壺の帝五十歳にならせ給ふ」と記しているが、これは誤りで、五十の賀を迎えたのは、「一の院」が正しい。

(11) 一四六頁の「都花苑」は、「柳花苑」の誤植。これは、印刷所の責任だろう。(12) 一四八頁の「齋宮」は、「齋院」の誤り。これは、角田の勘違いである。尤も、このあたりの賢木巻の文脈はいささか読み誤りやすい。原文を要約しようとしたので、誤ったのである。なお、一四九頁の「崇り」は「崇り」の誤植で、これは印刷所の責任。

(13) 一五〇頁で、光源氏の年齢を二十一歳としているのは、本居宣長以前の旧注の年立に従ったもの。現在の学説では、二十二歳。同様に、一五一頁の「二十二歳」は、現在の通説では二十三歳。古い『源氏物語湖月抄』の年立に従っているわけである。

(14) 一五一頁で、光源氏が六条御息所を「六条に音づれ」とあるのは、「六条御息所を野の宮に音づれ(訪れ)」の勘違い。

(15) 一八一頁の横笛巻の梗概で、「匂宮」が夕霧たちと管絃の遊びに興じたところのは、誤り。螢宮であろう。「兵部卿宮」に該当する人物を、一世代、錯覚したのであろう。

(16) 一八六頁は、「紅梅巻・竹川巻」の梗概を一括して記すという形式ながら、紅梅巻の梗概はカットされている。このあたり、締め切りの時間に追われ、作品の本筋からいささか逸れている紅梅巻の要約に四苦八苦している著者の姿が、目に浮かぶ。このあたりで、角田柳作は泣きたくなくなったのではないか。『源氏物語』は、長編なので、梗概をいくら書いても、簡単には終わってくれない。

(17) 一九七頁で、匂宮が最初に浮舟に接近する場面で、実事(男女関係)がなく、意を遂げずに終わった、とあるのは正しいが、その匂宮が「帰りぬ」とあるのは、意味不明。ここは、匂宮の自邸の場面なので、どこへも帰るはずがない。角田柳作は、具体的な場面がどこで展開しているのか、一瞬見失ったのである。

(18) 二〇二頁で、瀕死の浮舟を助けたのが、横川の僧都の「母の尼」とあるのは、「妹の尼」の誤り。

以上の十八点は、『紫式部』の不適切箇所のすべてではない。意地の悪い目で探せば、もっと多く、少なくともこの二倍程度は指摘できよう。実際、角田柳作の『井原西鶴』が現在の国文学界から黙殺ないし笑殺されているのは、このような「あら探し」の結果なのであり、緑亭主人の『紫式部』が国文学界から忘却されているのも、同じ理由からである。あるいは、角田柳作本人が「緑亭主人」という筆名での著述活動を自ら抹消したのも、誤謬の多さへの自責の念が強かったためかもしれないのだ。

ただし、『紫式部』には、文芸批評として燃えるような情熱がある。研究としてはいくつかの欠点があったとしても、批評としてあるいは「文学」として、たぐいまれな個性の発露が認められる。わたしは、緑亭主人の業績を明治文壇の一翼を担った「民友社文学」の一つの達成として高く評価すべきだと考える。

では、『紫式部』の批評としての卓越性は、どこに求められるのか。まず、『源氏物語』の主題を、「愛の不如意」の物語として大きく把握した点である。光源氏だけでなく、すべての登場人物が、理想の愛を得ることができずに苦悶する。そして、『源氏物語』のすべてが「愛の不如意」で首尾一貫して追究していると

喝破した点である。論者によっては単調(モノトナス)に見える一貫性が、紫式部の霊筆によっていささかの緩みもなくまとめ上げられている。それほど、紫式部の世を憤る気持ちがあったのだ、と彼女の心の中を覗き込む。そして、古代思想史、ひいては日本文学史全体の中に、『源氏物語』という作品と紫式部という人物とを位置づける。

その説くところは、結果的には本居宣長の「ものあはれ」の言い換えであったとしても、単なる宣長の説の模倣ではない。「ものあはれ」の美学の近代化を意図したとも言えるかもしれない。坪内逍遙『小説神髓』は、宣長の『源氏物語玉の小櫛』に学んだ痕跡がある。東京専門学校で逍遙に学んだ角田柳作は、日本のすぐれた文学批評と、西洋の文学批評とを、彼なりの方法で総合しようとした。我が国の古代文学に直接の発言を多く残さなかった逍遙よりも、ある意味で角田柳作の方が先行すらしていた。

学生時代に、シェイクスピアの評価をめくり、角田は逍遙から叱られたという逸話がある。師弟の関わり的一面を照らし出すものである。

## 7 緑亭主人『清少納言』の表現と思想

緑亭主人の『清少納言』も、角田柳作の著述の代表作として、もっと評価されてしかるべきである。まず、例によって、『清少納言』に見られるキーワードを列挙する。これまでの列挙と重複する箇所もあるが、その理由は何度も述べたので諒とされたい。

(1) 三頁の「進化説」は、角田柳作訳『社会の進化』(キッド原著、開拓社、明治三十二年)ともつながる彼の強固な問題意識を示すもの。緑亭主人は、文学を狭義で捉えることなく、常に「社会」ないし「時代」あるいは「歴史」の中で捉え、なおかつ「人類」と「個人」の関係にも触れる。普遍と特殊の二つの目を持つた見方である。

(2) 四頁の「柳条」は、「柳作」という本名と関連するか。一五頁には、「緑波」「柳は緑、花は紅」と、平安京の美を語る。一七頁には、「緑陰」とある。また、一六頁で、「母の懐」と述べるのは、角田柳作の「母性への憧れ」を示すもの。『早稲田文学』に、角田柳作が筆名で載せた文章があるかどうか、探したことが

ある。その結果、もしその可能性があるとすれば、この文章だろうと推定した短文がある。何の根拠もないので、ここでは筆名とタイトルを記さない。しかし、それは、「柳」と「母」をキーワードとする哀感に満ちた短文であったことだけ言い添える。

(3) 七頁で展開される古代文学論は、角田柳作の初期思想の根幹であり、後期思想の母胎となったものである。また、八頁の「八雲たつ」の歌は、角田柳作の著作と推定される『日本文学概論』の「古事記」の梗概部分と、一致する。

(4) 八、九頁の「鬱勃」は、緑亭主人が文学発生の説明する際のキーワード。

(5) 九頁で、「仏教の渡来」を古代社会最大の变革と位置づけるのは、後年の日本文学論の原型となった思想である。仏教徒としての角田柳作の問題意識の根幹でもあったと想像される。角田は、本願寺系の学校教育のために、明治四十二年にハワイへ渡り、それが昭和三十九年までの長い渡米生活の始まりとなった。

(6) 一二頁や八一頁の「卓厲風発」という四字熟語も、緑亭語の一つである。

『西行法師』二頁などに見える。

(7) 二〇頁の「千紫万紅」は、緑亭語の代表的なものである。

(8) 二二頁で述べられる「自然と闘う」あるいは「時代と戦う」清少納言の位置づけは、『井原西鶴』一八二頁で「自然と人」の対立関係の中に清少納言を位置づける姿勢と共通している。緑亭主人名義と角田柳作名義とで、清少納言に関する叙述に一貫性が見られるということである。ちなみに、紫式部は、「人と人」との関係性の中で思想的に把握されている。

(9) 一七頁や三〇頁の「銀燭紅燈」は、『井原西鶴』二一九頁と一致する。なお、角田柳作とはほぼ同時期に民友社に在籍し、民友社の文学者の一人として評価される角田浩々歌客の著書の中に、「銀燭紅燈」という四字熟語が見られる。これが、緑亭語であると同時に、民友社語でもあったことを示すものだろう。さらにいえば、民友社の「二人の角田」の間で何らかの交遊があった可能性もある。今後の研究の課題の一つである。

(10) 四一頁の「己を知るものは己より大なるは莫し」という諺ないし警句は、『雲井龍雄』四頁にもある。

(11) 四三頁の「千丈の高きに置かしむる」という漢文調の慣用句は、『兼好法師』五頁の「百尺の高きに置かしむ」とほぼ一致する。

(12) 五九頁「六花紛々」は、『井原西鶴』二二〇頁「六花の飛舞」と類似する。

(13) 六四頁「黒暗々」は、『井原西鶴』七三頁「黒濛々」とほぼ同じ口調である。

- (14) 六七頁「死灰の如く」という直喩は、『詩人西行』一三頁にもある。
- (15) 七二頁で「全部」と「局部」を対比しているのは、『井原西鶴』一三八頁における方法論と一致する。
- (16) 七七頁に「蹉跎」とあるのは、『紫式部』三三頁や『井原西鶴』一三四頁と語彙が重なる。
- (17) 七九頁の「日月星辰」あるいは「山川草木」という四字熟語は、角田柳作の基本的宇宙観にして、古代観を端的に示す緑亭語である。
- (18) 八六頁の「宇宙を大観」という発想は、『詩人西行』一頁にもある。
- (19) 一〇〇頁の「這般の」という言葉は、角田柳作訳『社会の進化』などに頻出する。

このような緑亭語に載せて、角田柳作は退廃した王朝貴族社会にあつて、古代精神の復活を試みた「反逆者」として、清少納言を位置づける。それは、退廃した世界に呑み込まれ、戦う意志を喪失して生きた井原西鶴への痛烈な批判となる。それだけでなく、「時代と戦う」姿勢は、角田柳作の戦時・戦後の生き方の最大の指針となっている。

角田柳作が緑亭主人という筆名で書いた『清少納言』は、その後の角田柳作の生き方を予告するものだった。すなわち、文学と宗教と倫理が一体化した希有の人生である。教育と研究と思索を一体化させた人生でもあつた。

## 8 「緑亭」という筆名をめぐって

明治二十九年七月に東京専門学校を卒業した角田柳作は、まだ民友社の正規の社員ではなかつたかもしれないが、「俳諧堂主人」という筆名で、主として『家庭雑誌』（民友社の中で最も軽い扱いの雑誌）に古典文学関連の梗概やエッセイを執筆・寄稿していた可能性がある。

尤も、「俳諧堂主人」「角田柳作」という特定に関しては、最後のツメがまだいくつが残っている。俳諧堂主人の名前で書かれた文章に、角田柳作の年譜と齟齬する箇所がほんのわずかだが存在するからである。ただし、弱冠二十歳の角田柳作が、自分を現実以上に大人に見せるために虚構を交えていたと考えることもできよう。

当時の民友社は、「西洋文学」と「キリスト教」を基本とする思想家が主流だった。角田柳作も、英語に堪能で、そこが明治三十年に正式に民友社に入社できた要件なのだろう。民友社の英字刊行物『極東』の校正係を、角田は務めていたとされる。

しかし、角田柳作は、「日本古典文学」と「仏教」を視野に納めた珍しいタイプの文筆家だった。そして、弱冠二十歳にして、従来の民友社に不足していた領域を一手に担う怒濤の執筆活動が奔流のように開始された。

これまでの「民友社文学」の研究では、徳富蘆花と国木田独歩ばかりが脚光を浴びてきた。今回の角田柳作の筆名による単行本の新発見により、「歴史思想家」あるいは「文明評論家」としての「角田柳作」を、日本文学史に正當に位置づける必要性が高まることだろう。

この時期の民友社は経営が次第に悪化しており、外部の著名な評論家への原稿料を支払う余裕がなくなり、若手社員の抜擢が可能だった。むろん、ただ働きではなかつたという証言がある。東京専門学校を卒業した角田柳作も、生活資金が必要だったろう。怒濤の執筆の一因は、「お金のため」という逼迫した理由もあつたことだろう。当時の樋口一葉が、そつだったのと同じように。

本来、最若手の角田柳作が『家庭雑誌』に書くことを期待されていたのは、単行本『紫式部』の後半を占める「源氏物語梗概」のような文章（紹介文）だったと推定される。これは、古典文学作品のわかりやすい「梗概」を重視した、単行本『日本文学梗概』からの推量である。また、『早稲田文学』の新著紹介欄でも、『紫式部』全編の中から、「この『源氏物語梗概』の部分をとり上げて高く評価されている。

しかし、角田柳作には、単なるダイジェストではなく、本格的な人物評伝への意欲があつたので、実に個性的な「評論」の展開が可能となつた。これが、「緑亭主人」としての角田柳作の実質的なデビューだった。

後年の角田柳作は、コロンビア大学でも、それぞれの時代の画期をなした思想家たちを点でつないでゆくという講義をしている。若き角田が採用したのは、源氏物語論や枕草子論や徒然草論や山家集論ではなく、人物評伝として紫式部・清少納言・兼好法師・西行などを描き、それぞれの時代的特質を日本思想史全体の中に位置づけるという手法である。作品論ではなく、人物論・作者論だったのだ。そして、それが取りも直さず、それぞれの時代の文学や宗教の発生論なのでもあつた。

しかも、すべての著作で、「日月星辰」や「山川草木」へのアニミズム的信仰に満ちた古代精神から説き始め、王朝・中世・近世という各時代の「歴史哲学」に必ず言及しているという律儀さである。コロンビア大学から出版された後年の角田柳作の講義録は、まさにこの手法の完成されたスタイルと言える。彼は、狭い意味での文学青年ではなく、透徹した知性をもった思想家だった。

話を角田柳作の出発点に戻すと、『紫式部』は、女性（主婦や女学生）のための古典入門という点で、まさに『家庭雑誌』にふさわしかった。まさに「婦道」を説いているからである。

角田柳作の最初の著作である『紫式部』は、『日本』『早稲田文学』『朝日新聞』などで取り上げられて書評され、好評だった。『家庭雑誌』の自社広告欄でも、『紫式部』が好評裡に重版されてゆくプロセスが確認できる。

それで第二弾が企画され、『紫式部』と同じく『家庭雑誌』号外付録として、『清少納言』の刊行となったのだろう。紫式部からの、自然な流れである。婦道や婦徳を説くという名目で、いつの世にも通用する高度の「正しい生き方」を称揚している。

『家庭雑誌』を舞台として、角田が早くから「俳諧堂主人」と名乗っていたのは、彼が芭蕉や宗祇が好きだったからだろう。これについては、ドナルド・キーン氏が角田柳作の文学観に占める芭蕉の大きさを証言している。コロンビア大学から出版された講義録の表紙には、角田の自筆で、

ふる道につもる  
木の葉をかきわけて

と記されている。改行の関係でわかりにくいだが、これは「五七五」の俳句である。角田は、俳句の形式で、古代精神史から近代精神の確立までのライフワークを提示しているのだ。彼は、本当に俳句が好きだったのだろう。『井原西鶴』でも、芭蕉の蕉風は高く評価されている。

さらに推測をたくましくすれば、本名の「柳作」は、「川柳作者」の意味になる。「緑亭主人」という筆名と、川柳の宗匠である「緑亭」とは無関係だと本論の最初で述べたが、それは角田柳作が俳句の中でも特に滑稽で教訓色の濃い川柳を好まなかったということではない。

彼の『家庭雑誌』へのデビューは、明治二十九年六月二十五日号の「教訓の発

句」であり、このエッセイにふさわしい筆名として、「俳諧堂主人」というものが考案された可能性もある。

あるいは、同時期に『国民新聞』（民友社）にいた、同姓の「角田浩々歌客」との区別が必要だったという事情もあったかもしれない。

この「俳諧堂主人」という筆名から「緑亭主人」への変更は、実に自然である。「緑亭」とは、川柳界の代々の宗匠の呼称であり、実際に「川柳」についても、俳諧堂主人は『国民新聞』に評論記事を連載している事実がある。

角田柳作が『家庭雑誌』に文章を載せるために採用したと推測されるもう一つの筆名の「欲東」については、その由来はまだ未解明である。ちなみに、民友社では、一人が複数の筆名を駆使することは通常であり、角田柳作にいくつかの筆名があったとしても不自然なことではない。

もし、わたしが推測しているように、「欲東」＝角田柳作だとするならば、その理由として角田柳作が、『国民之友』の英字版『極東』の校正係だったと言われることが挙げられるのではない。

「キョクトウ」と「ヨクトウ」の発音は、きわめて類似している。また、西欧だけでなく、「東」の文化にも目を向けねばならぬと言つ主張が、あったのではない。「欲東」名義のエッセイは、『家庭雑誌』掲載の日本古典文学の読書案内に限られる。

さらには、「角田柳作」の「柳」が「緑」と縁語である。角田柳作は、「花は紅、柳は緑」「柳緑花紅」という諺を好んだようで、彼の著した諸書に何度も見える。

何よりも、本名が「柳」作だから、筆名は「緑」亭なのではないか。俳諧堂主人の名前で、『家庭雑誌』に「緑蔭雑話」というエッセイを書いてもある。「緑蔭」は、柳の蔭であり、西行法師の名歌「道のべに清水流るる柳蔭しばしとてこそ立ちまわりつれ」すら連想させる。

また、「角田柳作」のイニシャルは、「RT」。これに、よくある筆名の「生」を足すと、「RT生」。少し発音を変えると、「リョクテイセイ」となる。

かくて、緑亭主人の名義で、怒濤の執筆が開始された。角田柳作が個人的に最も親近感を抱いていたのは、おそらく、西行だったと思われる。ところが、同じ時期に同じ著者名で、『清少納言』と『詩人西行』を出すわけにはいかないので、『詩人西行』の著者名として、角田は「中龍児」という一回きりの筆名を考え出した。

「龍」が「柳」と響き合うかとも思うが、この筆名の由来をまったく明らかに

することができない。

そして、「紫式部・清少納言」という「王朝女性陣」に対して、「西行・雲井龍雄・兼好法師」という乱世を生きた「男性陣」の人物評伝が矢継ぎ早に日の目を見た。

角田柳作の単行本だと今回わたしは推定した作品群は、ほとんどすべて『早稲田文学』に、その書名が見える。この事実から推して、「緑亭主人」は早稲田出身者である可能性が非常に高い。『早稲田文学』では、角田柳作の著書は概して好評だが、『雲井龍雄』には厳しい評価がなされている。確かに、読み応えがない失敗作である。角田柳作が、初期の「若書き」「濫作」に対して最も恥の意識を持ったのは、言われるような『井原西鶴』ではなくて、この『雲井龍雄』だろう。

『兼好法師』は、『早稲田文学』に掲載されたばかりの水谷不倒の徒然草論を取り込みつつ、反論するという意欲作である。『早稲田文学』と大変に深い関係を持っていたのが、緑亭主人なのだった。

『井原西鶴』は、角田柳作という本名で発表するだけあって、大変な野心作である。狭い文学論というよりも、文化論・宗教論・哲学論であり、「文学」の限界を見据えた「日本論」ないし「人生論」ですらある。これで、「角田柳作」の「古典文学評論」シリーズは、完結した。

『井原西鶴』のみを本名にしたのは、あるいは彼の「民友社退社」と、関係があるかもしれない。また、序文を書いてもらった幸田露伴に対する感謝の気持ちかもしれない。ただし、井原西鶴の最初の研究書が出たことを喜ぶ幸田露伴は、角田柳作が井原西鶴の人間性を痛罵している本文を読んだら、さぞかし激怒したことだろう。『六合雑誌』で酷評された失意の念から角田柳作は批評の筆を折ったという説明がなされることもあるが、そうではなからう。それを言うならば、露伴の不興を買ったことも大きかったはずである。ただし、広汎な『露伴全集』を当たっても、露伴が角田柳作や緑亭主人に言及した箇所は見られない。これも、今後の探索課題の一つである。

『井原西鶴』には、これまでの「緑亭主人」「緑亭生」「中龍児」名義の単行本にはない、大胆で思い切った思想的叙述が見られる。本書をもって、民友社における「古典人物評伝」の「卒業作」としたいという覚悟がうかがわれる。外部要因がなくても、おそらく角田柳作は内発的に著述活動の飽和点に達し、筆を休めるつもりだったのだろう。

他者を切れば、自分も切られる。批評とは、まさに諸刃の剣である。『井原西鶴』は、西鶴を切った返す刃で、角田柳作の魂そのものも鋭く切り裂いた。そう、痛々しさが滲み出る行文である。

その後の刊行である『日本文学梗概』では、本名も筆名もなく、無署名となる。民友社を退社していた可能性が、高い。ただし、この本で『古事記』の神名を詳しく列挙しているのは、後年の角田柳作の古代思想研究に大きく寄与したことだろう。

以上を要するに、わずか一年間の執筆活動（角田柳作の満十九歳から二十歳まで）で、『古事記』・『源氏物語』・『枕草子』・西行・『徒然草』・西鶴・幕末などの「思想史」が、「神名」「人名」の連続体として、歴史的に総覧された。

ここまで古典文学に通暁した角田柳作だからこそ、後年のコロンビア大学での講義が可能だった。そして、優秀な教え子が輩出したのも、ここに最大の理由がある。

古典文学のほとんどを「批評」できるだけの素地と実績を、既に二十歳までに成し遂げていたのである。しかし、角田柳作は、なぜか過去を封印してしまった。自分が過去に書いた内容を強く否定した『書斎・学校・社会』の序文の意味は、実に深い。

そして、角田柳作は終生、愛弟子に対してすら、自分の華々しかった青春期の批評生活を一言も語らなかつた。何が、そこまで徹底的に彼の青春を封印させたのか。さまざまに憶測は可能だが、すべては今後の課題である。

## 9 おわりに

「緑亭主人」「緑亭生」「中龍児」は、角田柳作の筆名である。

角田柳作は、十九歳から二十歳にかけて、『紫式部』『清少納言』『詩人西行』『雲井龍雄』『兼好法師』『井原西鶴』『日本文学梗概』の七冊を、立て続けに世に問った。このうち、『井原西鶴』以外の六冊は、新発見である。

そう考えて初めて、明治三十年前後の民友社の文学状況が理解できる。また、角田柳作の既に判明している実人生と、決して矛盾しない。

この事実を、数々の著書の表現を論ずることで証明してきた。厳密な意味での「立証」ではなく、「仮説」であるのが、痛恨の極みである。

今後、新資料が出てくれば、仮説を立証する決定的な証拠と出会う可能性がある。それは、おそらく、群馬県勢多郡赤城村大字津久田の角田本家の土蔵である。角田柳作の面倒を見た長兄・保太郎の直系の子孫である。けれども、調査の機会にはまだ恵まれない。

ただし、いわゆる「証拠物件」がなかったとしても、わたしはある程度は満足している。文学者にとっては、「表現がすべて」である。その「表現」の分析から、わたしは断言できる。

「緑亭主人」「緑亭生」「中龍児」は、角田柳作の筆名である。そして、そのほかに、複数の筆名を駆使し、また無署名の記事も量産し、角田柳作は明治二十九年から三十年にかけての民友社を疾走した。この疾駆の果てに、「アメリカにおける日本の父」という栄誉が待ち受けていたのである。

【付記】本稿の執筆に関して、東京大学付属総合図書館、東京大学社会情報研究所、早稲田大学中央図書館、明治大学図書館などには、多大の便宜を図っていただいた。また、島内景二の勤務する電気通信大学図書館、島内裕子の勤務する放送大学図書館の蔵書や文献複写依頼も、大いに活用させていただいた。これによって、角田柳作に関わるほとんどすべての国内・国外の文献を収集することが可能であった。関係各位に、心から感謝申し上げます。

なお、早稲田大学中央図書館の図書と雑誌の閲覧に際しては、早稲田大学文学部の大久保孝治教授のご紹介に与った。心からの謝意を表したい。



## DISCOVERY OF SIX BOOKS BY TSUNODA RYUSAKU

Reconsideration of Minyusha Publishing in the 29th-30th period of the Meiji Era

Keiji SHIMAUCHI

### Abstract

Tsunoda Ryusaku (1877-1964) devoted himself over the latter half of his life to the research of Japanese culture at Columbia University. He was also an excellent lecturer, and many outstanding scholars of Japanese studies (e.g. Donald Keene and Herbert Norman) were inspired by his series of lectures. Tsunoda is, therefore, renowned as "the father of Japanese studies in the USA".

It had been posited that Tsunoda's first publication was "Ihara Saikaku", published on 30th May of the Meiji era, by Minyusha Publishing. We discovered, however, that earlier publications existed. In fact, he wrote many books and articles immediately following his graduation from Tokyo Senmon Gakko (today's Waseda University) at the age of 19. The newly discovered publications are as follows:

Tsunoda wrote six books, under three pseudonyms, (i.e. Ryokutei Shujin, Ryokuteisei and Naka Ryuji). They were published by Minyusha Publishing within a six-month period, between 29th November and 30th April of the Meiji era. The books are: (1)Murasakisikibu, (2)Seishonagon, (3)Poet Saigyō, (4)Kumoi Tatsuo, (5)Kenko Hoshi and (6)@@@.

Additionally, it is conceivable that Tsunoda wrote "The Summary of Japanese Literature" (*Nihon Bungaku Kougai*) as well, though no author is named on the book. Moreover, he anonymously produced a great number of novels, critiques and essays for a newspaper, "Kokumin Shimbun", and a magazine, "Katei Zasshi", published by Minyusha Publishing.

These findings are significant, because they shed light on the intellectual development of Tsunoda, "the father of Japanese studies in the USA". It was revealed that his early publications, concerning the authors of the Japanese literature from ancient times to the Meiji Restoration, contributed to his further understanding of Japanese culture. It is particularly noteworthy that Tsunoda's early publications demonstrated that he regarded Buddhism as the central core of the Japanese historical spirit. This can be evidenced by the fact that he subsequently discussed this very issue in his series of lectures at Columbia University. Our findings show that, using sophisticated language, the young Tsunoda Ryusaku powerfully and convincingly argued that this Ancient spirit differently affected the character of each Age.

キーワード : 角田柳作、緑亭生、緑亭主人、中龍児、民友社、コロンビア大学、アメリカの日本学、家庭雑誌、国民新聞、俳諧堂主人、欲東、紫式部、清少納言、詩人西行、兼好法師、雲井龍雄、井原西鶴、日本文学梗概